



鈴木重胤大人撰

皇國語學捷徑

大阪 鹿田築雲堂藏



古川氏記



Handwritten text in cursive style, consisting of several vertical columns of characters.

門 2  
241  
卷 1

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial letter 'E'.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial letter 'E'.



漢字三音考といく皇大御國ハ天地ノ間ニアラユル萬國  
 ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。即  
 其御後ノ皇統天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千  
 御代マテ天下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マクモ可畏天皇ノ尊  
 ク坐マスコト。天地ノ間ニニツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マ  
 セバ。異國ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ  
 理リ著明シ。中サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。

詞捷徑上卷

大旨

源重胤著  
源春夫校

漢字三音考といく皇大御國ハ。天地ノ間ニアラユル萬國  
 ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。即  
 其御後ノ皇統天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千  
 御代マテ天下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マクモ可畏天皇ノ尊  
 ク坐マスコト。天地ノ間ニニツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マ  
 セバ。異國ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ  
 理リ著明シ。中サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。

○この本のちつとら 大旨 上

方位モ萬國ノ初二居テ、人身ノ元首ノ如ク、萬ノ物ノ事モ皆  
勝シテ美キ中ニ殊ニ人ノ聲音言語ノ正シク美タキコト亦  
愛ニ萬國ニ優テ、其音清朗ト清クアザヤカニシテ、譬へバイ  
トヨク晴夕几天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク、イサカカモ曇リ  
無ク、又單直ニシテ迂曲シル事無クシテ、同書小「外國人ノ音  
リテ、譬へバ曇リ日ノ夕暮ノ天ヲ瞻ル」真ニ天地間ノ純粹正雅  
ノ音ナリ、といえり。此ハ古語小「言靈能佐吉播布國まど  
事靈之所佐國」この二つは言の心ハ、皇大御國は言語ハ實小  
意ヲ含蓄セシムルガ、其用込小れのづらりと嚴そつかり  
定格有テ、稱呼とあててハよく事物の本義とあらハ、轉リ  
用さてハ進退作用の言とあて、或ハその形状とあて、連ね  
ふて、そとハ彼我反對の條理あり、まど係辭とあて、てハ連ね

れハ意味の淺深とわらち、助辭とあて、てハ言外にこゝろ用  
ひヤ知リ、或ハ禁止の辭とあて、指揮の辭とあて、結辭と  
ふて、ハ上ノ言ハ下ノ意と別ちて、疑、治、定、過、泰、現在  
未來とあて、ためあど、べとも奇しく妙ふるよとあて、古  
語あて、心とつけて、といへる言ハこゝろと熱く得られとる  
思辨ふべくふむ、といへる言ハこゝろと熱く得られとる  
説マて甚も尊くふむ有ける、然もどもこゝろ言靈ハ妙用世  
かくきてふむ有けると、本居大人ハ如此く見顯ハ、出給て  
かく言舉せられたるふむ、千萬年ハ前小も後小も比類罕ふ  
る功績ハ有ける、音考、字音假字用格、詞の玉、緒、ふど、と、事  
ト先として、何くも、後、鈴屋翁の詞、八衢、詞、通路、ふど、目、さ、む、る、り、め、て、  
方、心と用ふる輩、ふん、いと多く出来、とめ、此、よ、ふ、ら、べ  
い、さをあて、まど、かさ、抄、の、ゆ、い、抄、も、此、よ、ふ、ら、べ

○ことばのちつとら 大旨

て必見るべし。然る小善事ヨキコトと悪事マカコトの繼ツぐ世ヨクに理コトハすべからざる。此大人の精説セイセツと竊モソくかから。聊イハけ過アツく見出ミて。我ワれけく得エたコげ小コ此コよレ彼カよレ何ナニくモ書カきトもト著シてイ出デてイ煩ワザいハしコとモ多クりハ。此コ互ニ爾ニ袁ハ波ハひハふハとモよレてイ其マ弊カよレてイ今イマハコ事實ジツジヤウをシ徴シしコ明アらシむル學問ガクハカ傍カけテ物モノとナりテ互ニ爾ニ袁ハ波ハひハすラらハのミかハじツらヒてイ生イ涯キハカ力チカラとモ用モふル人ヒトをモ多クりシめル。いハうハ小コ口クチをシしコ事コトあラずヤ。こノまヨりテ此コ捷セツ徑キョウハツくレるハ。此コ書シヤクおのりシ家ケ説セツとモ立タげテ言コト語ゴハス條ジョウ理リハツつケてイ見ミ得エるコト事コト等ト輯シユ免メ。それハ今イマ按アツてもモ記シしコ添ソヘてイ初ハジメ山ヤマ踏フミのミ志シをシりシとシてイ物モノとシるコト也ナリ。

音韻

同書ドウショ小コいイとトくクササテテ其コノ古コノ言コトハ正音ハタゞ四十七ニシテヤノ行ノイエト。ワノ行ノウヲ加フレバ。都ステ五十ナリ。此イエウノ各ノニツアル所ヲ以テアリ。ニツカト思ハバ一ツカト思ハバニツニシテ一ツトモニツトモ云カタシ。此妙ハアヤワノ三行ノ音ノ分レタルユエラヨク了。是ニカノ行サノ行タノ解セバ。オノヅカラ明ラカナルベシ。是ニカノ行サノ行タノ行ハノ行ノ濁音合セテ二十ヲ加フレバ都ステ七十ナリドモ。濁音ハタゞ清音ノ變ニシテモトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ攝スルモノナリ。一ノ言ニ濁ル例ナク。又二音三音ヲ合セタル言ニモ首ヲ濁ル例ナシ。凡テ濁ルハタゞ其中下二ノミアリ。然ルニ上へ佗ノ言ヲ連ネテ合セイフトキハ首ヲモ濁ル事多。月ヲモ望月ナドト云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドト云トキハ。カヲ濁ル。

○このハのちつら音韻

ガ如シ。此例ヲ以テ見レバ一言ノウチノ中下ニ濁アルモノモ  
其本ハ二言ノ連合セシモノナラムカ其意得ヤスキモノナ  
一ツハ二ツ例ニイハル祖父母ハ大母ノ義柳ノ箭之木  
窓ハ間戸袖ハ衣手筆ハ文手札ハ文板ニテ皆二言ノ一  
ナカクハ濁音モ皆此類ナルベキカ。○まゝ古史徴メ古語  
知カクハ濁音モ皆此類ナルベキカ。○まゝ古史徴メ古語  
濁音の希少ある由ハまづ今ハ誰モ濁音と思ハレド古語  
書小も多ク濁音の原ヲ思フハ始メ今ハ濁音と思ハレド古語  
ハ共ニ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
長ハ中ノ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
解カハ中ノ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
らガハ中ノ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
たガハ中ノ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
小ガハ中ノ清音立テ濁音ハ中ニ類ヒ凡テ濁音ハ一ニ限ラバ  
テ其五十ノ音ハ縦二五ツ横二十ツ相連リテ各縦横音韻  
調ヒテ亂ルニトコトナク其音清朗ナルガ故ニイサカモ相

涉リ紛ラハキ事モナク。○縦トハ  
列ノイハレテ所謂五十連音韻ト云ハレド今ハ  
圖ハハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
屋翁ハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
け小ハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
古言ハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
悉曇字母ハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
彼皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
て野行ヌ我ニ似ル皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
音ガハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
るガハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ  
まバ用テ五十連音韻ト云ハレド今ハ濁音と思ハレド古語  
へ用テ五十連音韻ト云ハレド今ハ濁音と思ハレド古語  
梵文ハレテ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ皇國此ハ固有ノ非バ

○この本のちゅうしん 音韻  
上四



思ひよらすふん。一一ノ音ニ平上本ノ三聲ヲ具シテ言ニ  
 隨テ轉用ス。○重胤云皇國ハ語言ハ、たゞ平上本ノ三ツの  
 小。侏離歟。古ハ音聲言語ヲ見おき聞おきて其方ごまのこ  
 といひハ爲れども。此方ハことバヨハハ。何事おさやせ。  
 ハ同書ニ先皇國ノ言語ノ法、連用ノ便ニ隨テ、同言モ三聲  
 本 轉變スルコトニテ、其轉變ニ依テ義ノ種々二分ルコト  
 アリ。日ハ平聲、樋ハ上聲、火ハ本聲ナルヲ、日影ト云トキノ日  
 上聲トナリ、山ハ平聲ナルヲ、山風山松ナドト云トキノ火ハ  
 トナリ、東山西山ト云トキノ上聲ニナリ、宇治ハ本聲ナルヲ  
 宇治川トイヘバ、上聲、宇治橋トイヘバ平聲ニナリ、如ク、何し  
 ノ言モ皆其聲轉スルヲ、若本音ノマニニ呼フトキノ、其義異  
 ナリ、カノ山風山松ノ如キ山ヲ本音ノマニニ平聲ニ呼べバ、  
 山ト風トニツノコトニナリ、山ト松トニツノコトニナリ、  
 轉ジテ本聲ニ呼フニヨリテ、山ノ風山ノ松トコトニナリ、ガ  
 コトシ、サテ山ハヤトマトノ二音、川ハカトハトノ二音ニテ、

コレヲ一音ツク分テ各四聲ヲ云トキハ、ヤハ上聲マハ平聲、  
 カハ上聲、ハハ平聲ナリ、然レドモ又ヤマトモカハトモ連リ  
 タル言ノウヘニ平上本アリテ、山モ川モ平聲ナリ、東南ナド  
 三音四音連リタル言モ、皆同ジコトナリ、然ルヲツノ連ナリ  
 タル音ヲ、一分テ平上本ヲ定ムトスルトキハ、紛ラハシ  
 クシテ分明ナラス、是、一言ノ内ノ音ハ、親シク連接タルガユ  
 エナリ、サレバコレヲツラネテ、一言ノ又五十二テ足サル  
 ウヘニテ定ムルトキハ、三聲分明ナリ、  
 音モナク餘シ凡音モナキユエニ、一ツモ除クコト能ハズ、亦  
 一ツモ添ルコトアタハズ、凡ソ人ノ正音ハ此ニ全備セリ、つ  
 此文ニ、サレバ此五十ノ外ハ、ミナ鳥獸萬物ノ聲ニ近キモノ  
 ニシテ、濶雜不正ノ音ナリト知ベシト、相對へていえれども、  
 と、  
 文ヲ約めて出せて、世ハ音韻家たららの悉曇、まゝ韻鏡、  
 玕設、よきていふ説もハ甚うけがさか、ひと、此と、  
 ごとくいひえさると、古今萬國といえバ音韻もハハハ  
 かなゆきべいごせ。

○ことばのちつらら 音韻

フへホふる。其證ハ口を開き喉より眞すぐ息を出せば輕  
くハ——と鳴る。息のおのづから口中へら聲ふる。又唇を開き寬  
げ齒を合せて息を出せば自然かろくヒ——と鳴る。息の  
ふき口中へひ。ろき小反して唇と合せ窄め齒を開きて息を  
出せば輕くフ——と鳴る。息のおのづから唇へ。又さらよ  
舌下脣へおつけして息をいぞせばおけづら輕く  
——と鳴る。息の内脣上脣下脣へ。こきよ反して口ひる  
と窄め口中とふくらめて上脣へむけて息を出せばおのづ  
ら輕くホ——と鳴る。息の上脣へふき口中。是と音よお  
かしてた——と言へば。喉音ハヒフへホふる。又今すこ

た——と鳴る。半喉半唇ハヒフへホふる。此音と長く  
ヒフへホると呼べば。韻よアアイウエオと出れ。こ  
音よ。○字音假名用。格又或説。依イと重紐うけてアイウエオと呼べバヤ  
レユビヨとおる。ウと重紐うけてアイウエオと呼べバワ井  
身エヲとおる。まゝエとかさ紐うけてアイウエオと呼べバ  
ヤレユビヨとおる。オと重紐うけてアオウエオと呼べバマ  
イウエオと歸るわ。○字音假名用格。喉音三行ハおい  
一ツナリサテッニシテ三ツ分レタル所ハ。あい  
五ノ音ヲ重又シバ。自然トツガマリテハ。おい  
をハ音トナルユエニ別ニ此ニ行ハアルナリ。故ニ古言ノ中  
ニあいはれ。おの音ノ重ナリタル言ハ一ツモアルコトナ  
と見え。まゝは喉音ニノミ此差別アリテ。餘ノカサ行ハ  
まらノ七行ニハ是無キハイカニトイフニ。マヅヤ行ハ行ハ

○ことばのちつちつ 音韻 上ノ六

音ハモトニ音ヅカサナリタルモノナシバ實ハイハユル  
 拗音ナリ然レドモ喉音ハ餘音ニ類セス柔輒隱微ナルユエ  
 ニニ音ヅカ重ナシドモオノヅカラツトマリテ直音ノ如ク  
 ナルユエニ此ニ行ノ音トナルナリ餘ノ七行ハニ音ヲ重ヌ  
 ルトキハサダカニ拗音ニシテ一音ニツトマルコトナシ故  
 ニ喉音ノ外ハミナ單行ナルナリとも見えざる考べ  
 これニ依テ思ヘバハヒフヘホハアイウエオと引出以爲  
 此導音マテアイウエオハ諸音ヤスふる統韻ハヤレユ  
 ヨワ井身エヲハ變化トスためニ重音ヲ用ゆる。○字  
 名用格ニ韻學家ニ喉音ヲ論セルコトアリドモ皆古言ニ昧  
 クシテ三行ノ嚴然トシテ相混ズニシキ義ヲ知ラザルユエ  
 ニ皆混雜シテヤ行ハ行ハ畢竟無用ノ長物ノ如シといえれ  
 べし然る事ハついでにいふヤレユハ舌頭ニていふ  
 べし詞ハ正ミラユルセテ隨ふべし。さて口ヲ閉ジ内腔よ  
 鼻ヘかけ又息ト出せばおのづうらくと鳴る。このク  
 ヲ

井身エヲハ重絲ウけてククククククと呼べばおのづうらカ  
 キクケコトとさこ也。これハ不熟音ハ圓熟して正音ハカキ  
 クケコトとさる。冬ハ下唇ヲうとん爲マ、まづ鼻よ歸入する  
 音ハ唇と齒と合せてすこし開きて息ト出せばス  
 ーと鳴る。これスーとワ井身エヲハ重絲ウけて。ス  
 エスと呼べばおのづうらサシスセフとさこ也。こまハ不熟  
 音ハ圓熟して正音のサシスセフとさる。舌頭マテ上齧  
 うら急ニ音ト出せば。テと鳴る。これテとヤレユヨマかさ  
 絲ウけて。ヤレユヨと叫べばおのづうらタチツテトとさ  
 こ也。此ハ不熟音ハ圓熟して正音のタチツテトとさる。古  
 来

○ことばのちのつら 音韻 上七



ろくおほさおる意おまばおで。加行の下は堅牢ナシヨウと志るせる  
 へ。ろお行の言かこさ意おまばる。佐行の下はサウセツ窄小と志る

五十連音韻圖

|    |    |    |    | 統韻 |    |
|----|----|----|----|----|----|
| 上齧 | 彈音 | 齒音 | 齧音 | 舌本 | 喉音 |
| ナ  | タ  | サ  | カ  | ア  |    |
| ニ  | チ  | シ  | キ  | イ  |    |
| ヌ  | ツ  | ス  | ク  | ウ  |    |
| ネ  | テ  | セ  | ケ  | エ  |    |
| ノ  | ト  | ソ  | コ  | オ  |    |
| 和順 | 剛直 | 窄小 | 堅牢 | 廣厚 |    |

|    |    | 重音  |     | 導音 |    |
|----|----|-----|-----|----|----|
| 所音 | 唇音 | 上腭音 | 喉頭音 | 唇音 | 半喉 |
| 喉  | ワ  | ラ   | ヤ   | マ  | ハ  |
| 齒  | 井  | リ   | レ   | ミ  | ビ  |
| 唇  | リ  | ル   | ユ   | ム  | フ  |
| 舌  | エ  | シ   | ク   | メ  | ヘ  |
| 舌  | ヲ  | 口   | ヨ   | モ  | ホ  |
| 大音 | 採曲 | 形狀  | 進前  | 渾融 | 變更 |

せろい。其行の言せばくちひさお意おまばる。多行の下は  
 剛直カウチヨクと志るせるい。其行の言剛ナシくつよお意おまばる。奈行

○この本のつらつらつ音韻

其下二和順と志るせるハ。其行は言柔くやいららる意か  
まばおる。波行の下二變更と志るせるハ。其行の言變り更る  
意おとばまア。麻行の下二渾融と志るせるハ。其行の言物と  
すべ圓むる意おれはまア。夜行の下二進前と志るせるハ。其  
行の言すくもゆくこころおまばまア。良行は下二形状と志  
るせるハ。此行ハ諸は言の下二うひて。其こころ有入居おと  
はぶとく體用は言の形状を表し意と達す言在はまア。和行  
の下二様曲と志るせるハ。其行の言およろなる意おれは  
まア。これらけおもぶとよく明らめおバ。自然音韻は靈妙  
おむいらとろく志らるるものおる。

體言

詞ハ衝といふうま書せし出しよア。其恩頼と蒙ふて。  
用言は方よハふらく心を用ひて。とかう云めまどこれ體言  
はこいおのづうらなる物おして。うは定格なる事し心づけ  
るさま小も見えざるア。余とごろ此事と。らうは口を  
おもひつらるおつけて。語彙といふ書と著述して。流布さど  
や。お心はまども。うハ天下は言語をことごとく彙むるさどお  
まバ。こころ小竟べくもあらばおんらる。此語彙は鈴屋翁の玉  
意と得る古史。徵は古今の言語を彙めんとらうは下がまへさ  
へらまつる。いとも止事おさ大業おとくはよて。得物し  
音す。其書の大意ハ體言用言はかきとて五十連音の次  
つるお。其書の大意ハ體言用言はかきとて五十連音の次

○ことばのちつとつ 體言

第一は、其徴を詳し其義を釋せまばいとく容易あら  
 ぬわらむらうよで、うき出來る生で、はこらけ年とやへ  
 ぬらむらうい、うでカと戮せてこ此ついでいさうら  
 けわごや相にすけおれ人もがな。此ついでいさうら  
 定格といふ人、體言といふもは種々小別きて、一は有形  
 體言、二は無形體言、三は用語體言、四は用語略體言、五  
 は二合體言三合四合も此例也。ふどすべて五種おる。うはさしも要  
 さ小似ともどもこは差別と熟く知らでい。ことをえりわ  
 くることいと難く又條理無けまば、いさうらおどろりす  
 る。○有形體言とハありつちひつさやまかハくささふどの  
 ぶとくかさちらる稱呼おて。○無形體言といと一つさひと  
 さとる春。夏。秋。冬はつらふやふも。形おさものく名目おて。○用語體

言といは、波行四宿。良行四瀧。多行四曇。良  
 四段。ふどおとく。用言は第二段おる。續用言といひすゑて  
 うれと物の名といは、宿。良行四龍。多行四雲。良行四  
 用言。やと。良行四龍。多行四雲。良行四。ふどおとく。用言は第  
 二段おる。續用言はくぶらていけ言とおさるおて。○二合  
 體言とハ、體言と二つ合せたるよて。譬へば天と地と二つ  
 合せては、天。地。日と月と二つ合せては、日月。山と川と二つ合  
 ひ。山と川と二つ合せては、山川。草と木と二つ合  
 せ、草木。さきといふが如し。まと同例よて。つ釣。船船。手手。得  
 も物。為業。ふどおとく。用語體言と上よおこて。佗の體言

○この本のちのつら 體言 上十

と下つら糸合せたる所。こまらつる船ひる瀉る物す  
つづけて用とふれと別して一度續用言と言ひすゑて體  
言とふしとると他の體言は上置るゝて類ひ多るもみ  
の中よ。どつわりちてこと小其物とさしていふと又それ  
と體言と二つ合せると上なると同例あり。又それ  
小反してやま山住ま圓居とかこ片戀ひ冬ふ枯也かまふと類ひ他  
れ體言は下。用語體言とつら糸合せたる所。これ上  
用とふすとい異してうれ體言とま歌と占ら笑窪ほふどれ  
かとの詞ふま等しとふと。如く用略體言は二つ合ひて言とふまる所。いづも下  
る言とむ糸とする時のことよて中間ナカラ小のもとを置てつ  
けたると同。餘ナカい准らへ知るべし。三合四合もさてかく  
連糸合せると言と合語ともいへる。こま小六の格ふむらる。

ろれ一よハ第四音と第一音と轉して。加酒さ槽とさかぶ糸  
佐風かせ早早とか早や多て枕手をた枕まくら奈い稻ね田稲とい稲ふ田た  
波苗おも苗代代と麻ハ目しろ目ろ目の輪目をま目ぶ目ち夜ひ冷え風冷をひ冷や風う風せ  
良枯か枯萩萩や萩から萩を和ぞ和こ聲ゑ大大と大こ大わ大た大ら大ふ大と大加加佐加多加奈加波加  
麻夜良和れ九行ともいらて此例いと多る。但阿行の  
さるハ阿行の音いづきれ言は下もつらぬ音ふと此例此ふ  
る五十連音れ中。阿行は音の下附らざると良行の音は  
上居らざるといづ。其二よハ第二音と第三音小うつ  
こもろれでう月なり。其二三よハ第二音と第四音小うつ  
加月つ月も夜夜とつ月く月よ月に月矛月と月ぬ月ほ月こ月行月か月み月風月と月か月む月か月ぜ月ふ月ど  
いふたぐひらる。此例ふ此べ此し。其三よハ第二音と第四音小うつ  
して。多多た多ら多帯多と多た多て多ハ多さ多ふ多ど多い多へ多る多ら多る。此例ふ此べ此し。其四よ

○こののちつら 體言 上十二



第二音と第五音小うつして、如き此間とこ此間。奈荷  
 符前。波火。行ひ串とちぐし。夜老。行おい繫。およかけおとい一る  
 のさた。行ひ串とちぐし。夜老。行おい繫。およかけおとい一る  
 此例もや。其六より第五音と第一音小うつして。行。白。山  
 と志ら。やまおとい一る。此例もや。かくは如く定まき  
 格に。て。る。は。連。て。つ。ぐ。所。は。さ。ま。小。依。て。然。う。つ。ろ。ハ。で  
 一え。の。ら。ぬ。わ。ご。お。る。ハ。如。何。と。い。ふ。通。略。延。約。辨。也。か。く。は  
 ぶ。と。く。音。と。轉。て。合。す。る。ハ。下。は。詞。の。意。お。も。く。上。は。詞。の。意  
 かる。時。は。事。お。ま。とい。え。れた。る。て。よく。通。え。た。り。す。べ。て  
 此。言。語。か。く。は。お。と。く。規。則。と。た。て。て。足。ま。は。其。條。理。を。ハ。や。り  
 ま。え。わ。ら。う。も。は。お。ま。

用言

用言とい上ある體言小對へていふ名ある。轉てとらく小  
 よて活言ともいふ。本居春庭翁の説は。詞の用ハい  
 小とも言ひ知らべ。いとく奇しく妙なるもの小して。一  
 つ詞もその用法小よて事か。たたらさ小隨ひつ。意  
 も異に聞えふ。千は事と言ひ分ち萬のさまと語  
 別つ。いとらも紛る。事かく。又見る物さく物。人の心よ  
 かり。このさる思ひの穰。すべて世中よりと有ること  
 いく千萬の事あるとも。言盡しま。杯びやらむ。足ハぬ事  
 くらぬ事ある。此とらさ小依る。さ小おむ有るける。

さるハ神代よ。自然定格<sup>オホカラサガリ</sup>にて。今世小いさるまで轉<sup>ウツ</sup>變<sup>カハ</sup>  
る事<sup>イサカ</sup>少<sup>カ</sup>く違<sup>アヒ</sup>い誤<sup>アヒ</sup>るとい。その事<sup>イサカ</sup>ららば。其意通<sup>ヤコ</sup>え難<sup>ガタ</sup>  
き物<sup>モノ</sup>小<sup>コ</sup>一有<sup>ヒトモシ</sup>バ。一字<sup>ヒトモシ</sup>と雖<sup>イト</sup>も獲<sup>トク</sup>て小<sup>コ</sup>とぶさ獲<sup>トク</sup>ては加<sup>ス</sup>へかどす  
べて大凡<sup>オホヨリ</sup>はかすべさるものハ非<sup>ア</sup>びといともさ。かまその  
詞<sup>コト</sup>ハ衢<sup>キ</sup>と本<sup>ホ</sup>小<sup>コ</sup>して。かほ佗人<sup>アヒト</sup>々々考得<sup>カガヘ</sup>さる事<sup>コト</sup>どもともこと  
ぶとく小取纂<sup>コト</sup>め。ことと校合<sup>アヒ</sup>せことと訂正<sup>タダシ</sup>して此圖<sup>コト</sup>ハ製作<sup>ツク</sup>  
まて。さてその用言<sup>ヨウゴン</sup>一<sup>ヒト</sup>云<sup>イハ</sup>ハ大綱<sup>オホムネ</sup>すべて六種<sup>ムクサ</sup>あり。いとゆる四  
段活言<sup>シヨウカクゴン</sup>一段活言。中二段活言。下二段活言。變格活言。形狀活言。  
かど名目<sup>ナメ</sup>せる此<sup>コト</sup>か。詞<sup>コト</sup>ハ衢<sup>キ</sup>小<sup>コ</sup>こらね名<sup>ナ</sup>もともよ。りるよ  
非<sup>ア</sup>ざとも事<sup>コト</sup>と別<sup>ア</sup>ち言<sup>イハ</sup>ハむ。名目<sup>ナメ</sup>か。てハ便用<sup>ベンヨウ</sup>ら<sup>リ</sup>けき

ハ今<sup>イマ</sup>か。ておつけさるなり。下<sup>シタ</sup>すべて此名<sup>コノナ</sup>もていへ。と。りる  
よ。よ。りてもろく。け名<sup>ナ</sup>目<sup>メ</sup>ハ。その書<sup>シ</sup>と。て。お。け。お。の。お。こ。の。  
ろと定<sup>サ</sup>免<sup>メ</sup>れるも多<sup>オホク</sup>う。其條<sup>マチ</sup>く。小言<sup>コト</sup>ふと見て知るべし。  
○詞<sup>コト</sup>ハ衢<sup>キ</sup>よ云<sup>イハ</sup>く。四段活<sup>シヨウカク</sup>とハか<sup>カ</sup>さ<sup>サ</sup>く<sup>ク</sup>け<sup>ケ</sup>さ<sup>サ</sup>す<sup>ス</sup>せ<sup>セ</sup>とやう小<sup>コ</sup>第<sup>ダイ</sup>  
一<sup>イチ</sup>音<sup>オン</sup>よ。四<sup>シ</sup>音<sup>オン</sup>ま。でつぎ<sup>ツギ</sup>く。四段<sup>シヨウ</sup>小<sup>コ</sup>。何<sup>ナニ</sup>か人<sup>ヒト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>け<sup>ケ</sup>れ  
さん<sup>サン</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>お<sup>オ</sup>す<sup>ス</sup>お<sup>オ</sup>せ<sup>セ</sup>か<sup>カ</sup>ど<sup>ド</sup>活<sup>カク</sup>く<sup>ク</sup>とい<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>お<sup>オ</sup>。此<sup>コノ</sup>活言<sup>カクゴン</sup>か<sup>カ</sup>ど<sup>ド</sup>お<sup>オ</sup>く<sup>ク</sup>  
いと多<sup>オホク</sup>し。  
○同書<sup>ドウショ</sup>よ云<sup>イハ</sup>く。一段活<sup>イチダンカク</sup>とハさ<sup>サ</sup>さ<sup>サ</sup>る<sup>ル</sup>さ<sup>サ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>オ</sup>ける<sup>ル</sup>お<sup>オ</sup>ま<sup>マ</sup>か<sup>カ</sup>ど。第二<sup>ダイニ</sup>  
音<sup>オン</sup>一段<sup>イチダン</sup>の<sup>ノ</sup>よ。て活<sup>カク</sup>く<sup>ク</sup>とい<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>さ<sup>サ</sup>る<sup>ル</sup>き<sup>キ</sup>れ<sup>レ</sup>に<sup>ニ</sup>る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>ハ言<sup>ゴン</sup>  
とろ<sup>ト</sup>へ<sup>ヘ</sup>活<sup>カク</sup>用<sup>ヨウ</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>オ</sup>せる<sup>ル</sup>よ。て。其行<sup>マチ</sup>の<sup>ノ</sup>音<sup>オン</sup>ハ。か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ラ</sup>ざ<sup>ザ</sup>る<sup>ル</sup>お

○ことばのつづら 用言

ア。さて此活すべて一音よてきにふといふよ外ふけきハ。

此活言いとすくふ。取

○同書小云中二段活とハさくくるくま。ちつはるつとと第二

音三音よて。れさおくれくるおくま。おちれたつおつるれつま

ふと活くといふふま。くるくま。つるつまふとれるまハ。一段

活のところよいへるが如し。此活言も多からず。取

○同書又云く。下二段活とハ。えううるうま。けくくるくま。

第三音と四音との二段よて。えううるうま。けくくるくま。ふ

とととらくといへ。うるうれ。ぐるくれのるまハ。一段活の

下よ云るが如し。此活言のそといと多し。取

○變格活言とい上ふる四種活言とハ。大同小異よて。いづま

に活言小も屬ぬ一種あるや。かア小變格とハ名づけたるふ

ア。加行よこきくくくれ。中二段活言小大同。佐行

小せしすするすれ。下二段活言小大同。奈行よふに

ぬぬるぬれ。四段活言と下二段活言と。あ。良行小らりるま

の。四段活言と大同とくして。有。小異ふア。とあはせて四つある

○形状活言とい上ふる五種活言ハことく。進退作用の

言ふる小對てくくさけれくくさけきけくけけき

けきと。凡て物の形状といへる言ふる小よア名づけさア

さてそのくくさけきの行よ。かア久活言といひくくさ

○ふまのちいしつ用言

上十五

志久の行とか、小志久活言といひ、けくけくけく  
も乃行とか、小祁久活言といへ。然まども本義といへば、  
形状とさす言ふるを以て形状活言と号けて、此一統の活言  
此名目とせるも。

○上の六種活言のくごで、五段に分ちて、第一段と將  
然言といひ、第二段と續用言といひ、第三段と絶定言といひ、  
第四段と續體言といひ、第五段と既然言といへ。

○將然言といひ、この段の言、將然らんとする意にて、既然言  
はあひむりひたる言ふて、いさうその差別をいふと、たと  
へば同トむと受る辞にて、將然言と既然言よそのうく

る意かてて、こよをわをれさむとくまば、あやゆと  
とまへよ、孫がふ意ふあると、既然言よわけおせむと  
うくまば、後よまへむをゆるといふ事よあて、大よけ  
ぢめらる事、唱へあうてことるべさあて、漢字三音考よ  
第一音ハ未然ラザルニ用、とらまど、うらべ。

○續用言といひ、漢字三音考よ、第二音ハ方ニ然ルヲ下ヘイヒ  
オクルニ用、とらるふよておづけとて、何る人ハ連用言と  
いへ、續と字義ましく同トく用ひ來せむと、其つゞけざ  
まこくよ、連よ、續のかさうあへるやうよおほむまば、今  
ハおのがこくろと思定めて、續用言とおづけれるか、さて

續用言とい。此段の言と唱へ試みる小。何やらいひさしたる  
如きこころをる小よて。下は用言とそふまば。その事達る  
ふていさし事おついで。續用言。絶定言。續體言のけぢめ  
といまむ。たとへば同ト下二段活のふがるといふ言も。拾遺  
小音ふしの川とづつひよふがれいづる。言へでものおもふ  
人のふさどい。こまはここれ續用言よ用ひとるおて。まご古  
今よ立田川もこち葉おぐる。神おびの御室に山おしくもふ  
るらしとあるハ絶定言よ用ひてとるこことばおて。まご後  
撰よ。もこぢ葉のふがるハ秋ハ川ごとよ。錦洗ふと人やとる  
らん」とあるハ。續體言小用ひとるよて。秋といふ體言へ續け

たるがごとくいく千萬の言語よても。此格小もるハ事ふし。  
まご此言といひすくれハ體言とちるおて。上ふる體言の條  
よ用語體言まご用略體言ふどいへるハ則これおて。  
○絶定言とい。漢字三音考よ。第三音ハ方ニ然ルヲイヒサダ  
ムルニ用。とあり門人某が説よ絶ハ截斷の義おて。定ハ字書  
よ安也決也又止也と見え。周礼よ美定の字ありて。註よ定猶  
熟也熟即止故以定言之とあるおと。彼此考合せて然名づけ  
たるよ隨へて。さて此段ハ何ゆゑよ絶定言といふぞとおま  
をたとへばのどけき春あつさ夏すどしき秋さむき冬とい  
つとけども。のどけし春あつし夏すどしき秋さむき冬とい續

うず。詞もさはいともびれのづからきるし小よアてあア。な  
は續體言の下よ見合せてさとするべし。

○續體言といひひかがしよ下へつとて。おとむれ趣意を  
こよて落著せぬあア。たとへば春のどけし夏にあつし秋  
はすい冬いさむしといひ。絶定言とあアて。詞も趣意も  
落著するぞ。春はみどけし夏はつと秋はすい冬はさ  
むさといひ。詞も趣意も落著せば。打とれるまゝふては  
落著せしやうあまど。どよやら小心すしねせぬやうよおほ  
ゆるあア。そい何ゆあまさやうふるふりと。尋もとむまば。あ  
ハ絶定言とバ續體言あまばなア。又いうよして續體言ふる

ぞとおもひて。ロよいひつどけ見まバ。春のどけさよの夏  
はあつとも秋はすいとも冬いさむさものとやうよ。  
物といふ體言へ。あつらつらつとて。詞も趣意もこよて  
落著するあア。こよよアて續體言とあづけて。或人の連體  
言といへるいとらず。

○既然言といひ。既スナ然るといふ言よて。上ふる特然言よ對へ  
さる名あア。いさしり其差別サバと言はんよ。後撰よ「あさら夜の  
月と花とを同トくバ心しきらん人小見せむや古今よ天の  
川もさちと橋よ渡せむやれあむとつめれ秋をしも待つ。」と  
ある此二歌ともよ。せよアむやと受されど。前ふるハ下二段

活言佐行の將然言よてむと受けてそま小願のやと添する  
か。俗ヨと云ふ意ふ。後ふるハ四段活言佐行の既然言よ  
てむと受けてそま疑のやと添たるふ。俗ヨ「ワタスユエ  
カシテ」といふ意  
か如此く大ケ差別サマのることふ。よく辨ハべし。

○諸の用言どもと。其まよてハ未語イモと成ナざるも多オホう。譬タトヘ  
ハ四段活言よて。ありれさかどいひてハ何の事とも辨ワカへ難ガシ  
きと運用活言ニ受ウケ辞ジとそへてありずありでありトありん  
りまハりりバ。又マかさずあさトれさんあさハかさハばとや  
う小言コト一ハ語ゴと成ナて聞キゆるが如し。又其受るところよアう  
つて活ハ用ラく事よてありずハありぬあり糸イトと轉ハ用ラさありん

ハありめと轉用さかとする事。用言の例タれがふ事さか  
ま詞コト八衢ヤチ小も記さまカさる如く受る辞もて六種の活言と分  
定サむるが甚イ正シくて聊イサカも違チガふ事ふけまハみハふる將然言の  
下シハ。すハでハんハまハずハとハ志シる。續用言の下シハ。いハてハつハぬ  
るたハけハさハとハ志シる。絶定言れ下シハ。めハらハんハべハらハし  
とハらハしとハ志シる。續體言の下シハ。かハまハてハにハよハうハがハとハ志  
る。既然言れ下シハ。いハかハどハと記シせること。本書の例タは倣ナへて。  
何度ナニも讀ヨみそらんトおがえて。わが物モノよかハえて。物モノたら  
むハハ古の言コトとくハ得エやすく。今事イマコトと記シすふとハいハやハま  
らハらハむ物モノぞ。

○ことばのちつらり 用言

○ことばのちづつから用言

| 言 | 狀 | 形 | 言 | 用 | 格 | 變 | 言 | 用 | 段 | 二 | 下 | 言 |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 和 | 邪 | 久 | 良 | 奈 | 加 | 和 | 良 | 夜 | 麻 | 波 | 奈 | 多 | 佐 | 加 | 阿 | 和 | 良 |
| 行 | 活 | 活 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 |
| 違 | 惡 | 善 | 有 | 本 | 爲 | 來 | 植 | 枯 | 消 | 求 | 添 | 兼 | 捨 | 失 | 受 | 得 | 率 |
| け | く | く | ら | お | せ | こ | え | れ | え | め | へ | ね | て | せ | け | え | ね |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| か |   |   | ぞ | ず | ん | は | ず |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ぞ |
| け | く | く | り | に | し | き | え | れ | え | め | へ | ね | て | せ | け | え | ね |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| て |   |   | き | け | ら | ぬ | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   | き |
| け | く | く | り | ぬ | す | く | う | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う | る |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| は |   |   | は |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | は |
| け | く | く | る | ぬ | す | く | う | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う | る |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| が |   |   | が |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | が |
| け | く | く | れ | ぬ | す | く | う | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う | る |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ぞ |   |   | ぞ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ぞ |

| 用 | 段 | 二 | 中 | 言 | 用 | 段 | 一 | 言 | 用 | 段 | 四 | 五 |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 夜 | 麻 | 波 | 多 | 加 | 和 | 夜 | 麻 | 波 | 奈 | 加 | 良 | 麻 | 波 | 多 | 佐 | 加 |
| 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 |
| 老 | 恨 | 戀 | 落 | 起 | 居 | 射 | 見 | 干 | 似 | 著 | 鉤 | 住 | 逢 | 打 | 押 | 飽 |
| い | み | ひ | ち | き | お | い | み | ひ | に | き | ら | ま | は | た | さ | か |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ん |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| い | み | ひ | ち | き | お | い | み | ひ | に | き | り | み | ひ | ち | し | き |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| な |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ゆ | む | ふ | つ | く | お | い | み | ひ | に | き | る | む | ふ | つ | す | く |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| は |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ゆ | む | ふ | つ | く | お | い | み | ひ | に | き | る | む | ふ | つ | す | く |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| を |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ゆ | む | ふ | つ | く | お | い | み | ひ | に | き | れ | め | へ | て | せ | け |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ぞ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

五轉名目  
 將然言  
 續用言  
 絶定言  
 續體言  
 既然言





るむるゆるるくうると。俗言ハ第二音よりついでとるら  
るひるるるるるるるるるるといへ。かくるとれとるとづる  
ととぢるおどいへるが如し。取意

○下二段活言ハ十行とも小ことぐく有り將然言と續用言  
と同ト言ふ。詞ハ衢ニ云く下二段活の第三音小るもトと  
添ていふ。うるくるするつるぬるふるむるゆるるくうると  
俗言ハ第四音の方にてえるけるせるてるぬるへるめるえ  
るれるるるとうついでとくくるとうけるやするとやせ  
るといふが如し。取意

○變格活加行ハ詞ハ衢ニ云くくるといふ詞のよて此外

かゝる受る辞おど圖の如し。但、おまらけ辞と受るハ、さゝと  
うと受る格おると。うれいと稀こ小て。とゝおらふとこよ  
と受とる多し。さてすべてけ活ハタラニ。第五音ニ活くことおまきの  
よて外ニ例おし。

○同活佐行ハ詞ハ衢ニ活マきご受る辞おど圖の如し。但、お  
まらふとけ辞と受るハ、およと受る格おると。さゝいとけせ  
しせしうおどせよとけし受るも外トハ異お。すべて圖ニ  
出せる辞ハ、五つニ別きて相混マヒ雜マシる事さらニ無さ。右の如  
くおまらけ辞のミ他よりつきて。加行の變格もこの辞と  
こゝけ如く用たるおどよく似と。こゝおるハ第四音ニ活

きたると加行ふるハ第五音ニ活きたるけ異<sup>下</sup>て。其外ハ  
 全く同じといえれざるが如し。まさ何くも此體言用言ニテ  
といひすゑて體言もその言  
 言とあつたる。此詞ニ活らせて。何すると多くいへり。  
 又中むろしけ言ハ。えんずる糸んずるおどもいへり。但體  
 言よ受るハ清之。用言じんよ受るハ濁マていふ例あり。  
 ○同活奈行ハ。詞八衢ニ云く。往死<sup>シ</sup>の詞ニツのこふり。活きざ  
 さい。大低四段ニ活の如くにて。切るとつぐくとの詞ニツ  
 二分も。ころのむすび二つあり。  
 ○同活良行ハ。有居<sup>アリ</sup>の二つのみあり。詞八衢といえれざるが  
 如く。四段活にくすつふむるハ。絶定言<sup>キルコト</sup>と續體言<sup>ツクコト</sup>と兼れ

ばあるとあがとも。をるとをるともといふべき格ふるを  
 ありとありとも。をるとをるともといひ。絶定言<sup>キルコト</sup>とありと  
 いふ例あり。それらうめやらんべいらの辞ハ。續體言ふる  
 るよ受る事。大うの四段活ニ同ト。○まさ四段活の既然言。  
 けせてへめれよ。此活ニ受てあけらんけけあけるけけ  
 ませせらんれせやおせるおせれと既<sup>ス</sup>然<sup>カス</sup>有さまといふ言  
 あり。此故ニ萬葉ハ。飽有押有とやう。有の字ニ添らま  
 目をけ義あり。○まさ形状言活よ。此活よりけてより。よ  
 ありのけけけ。あけけけ。をるけけ。をるけけ。あり  
 引合のけけけ。のけけけ。のひきあり。のひきあり。とい  
 ふ言あり。まきらハ云云有といふ言ふる。その意急るる

よる。如此く其ことハのせまきるか。○まゝ運用活字圖の  
ざの引合たの引合たの引合たの引合たの引合  
合の引合の引合の引合の引合の引合の引合  
るものか。この故。有のころを合める事。運用活字圖。  
と結辞の下ふもいへ。併せ考ふべし。

○形状言ハ圖のごとく久活志久活祁久活とも受る辞の  
例上ふる五種活しい異か。さて此活の轉聲をもふしてよ  
ごとくざまかど下つづくる何ぞ。まゝ  
げかどあとうくる何ぞ。いひすゑて體言とせる。絶定言か  
るべくおもひるる。か。

### 自佗活言

上ふる四種活言の進退作用ふるふつけて。そきふらひて。  
自然すると佗よる然せらるゝとの分別は。詞通路カ歌よ  
む小も文かく小も事と記し小も。萬事と分ち其状と委しく  
知らするまきバ。專この自佗の詞の活用と。最と心得べき。  
さか。其ハおのづうらね定格の。此方の事と云ふま。  
此方小用ふべき言と用ひ彼方ハ事とかゝる小ハ。彼方小用  
ふべき語と用ひまきバ。其事委しく分ま。自佗混雜して言  
語成ハ其さま聞え難けま。等閑に思ひ過さ。よく辨へ  
置べき事か。抑此活用ハ千萬の事と。委しく言ひ分つわざ

○ことばのらうごら 自佗活言 上世四

ふまば。其活用ハタラクキさまも種タガく多うると。世の人自ジ他タのことむハ  
たゞ。烟カおどのたつといふハおのづうらたつ事コトいひたつ  
るといふハ人ヒトはたつる事コトいひ。重オモシ亂カいとく。うやうの自  
ハることよて四段活と下二段活とのうへ一の有アて。他  
の活言カクゴトよあづうらぬ事コトふまば別マふ。下シよくとしく辨ワへお  
け。花ハナのちるといふハおのづうらちる事コトちらひといふハ風  
もどのちらひハ。此コノハ四段活言カクゴト小コまよ四段  
活カク佐行サカヨウの添ソる例レイお。事コトとのニ思オモひて。委  
しく考へ知るべし事コトとも思オモはらず。又この事コトと論ロへる書シヤも  
無ナけまば。おのづうら心ココロと附ツクる輩トモガも無ナくおのノ歌ウタよシもの  
よく心得ココロとて思オモふ人も。取トルまづいてハ誤アヤる事コトふシ小コ非ヒび。  
況シて初學シヨウガクハ輩トモハ甚イたといハくハくハくハて。常ツニ誤アヤる事コト多オホけまば。其

定格サダカと教オシへ論ロじ。とて。自ジ他タの詞コトと六段ロクダンと次第シヤブて。一目イツメと  
見度ミタと心得ココロ易ヤスうらハしめ人ヒト爲ナす。圖ツ小コ出デてハ懇ネモ到コよシとされ  
とて。それレはたまハふゆハよハて。重オモシ亂カ此書コノシヤと著述アサハよシつけて。  
今イマとハ捷徑チヤウキチと見得ミエつるハよハて。一目イツメと見度ミタと心得ココロ易ヤスうら  
しめ人ヒト爲ナす。圖ツとハらハして其定格サダカと教オシへハしめすものハお。て。  
さてうハ自ジ他タとハらハつ辞ハ。佐行サカヨウ良行リヤウキョウ相アヒ雙ニ對シて受ウケる事コトよて。  
各上オノオノおる用言ヨウゴンのかさハおハるものよて。別マと一種イツルの活言カクゴト小コあ  
らハば。この故ユと受ウケるところよハて。五轉ゴテンする事コトすハしハも用  
言カクゴトハ例レイとたがハえハば。但シカ合ア離リれハことハバの自ジ他タハ此例コノレイとハらハさ  
まハ。下シと一圖イツツとハらハして別マと物モノせハて。

○ことばのらうウらハしハ 自ジ他タ活言  
上ウ五イ

|                            |          |          |          |            |    |
|----------------------------|----------|----------|----------|------------|----|
| ○<br>ことばのちり<br>自他活言<br>上世六 | 言活佗自格變   |          | 言活佗自段二下  |            | 言活 |
|                            | 有往       | 爲        | 來        | 植枯消求添兼捨失受得 | 率下 |
|                            | らか       | せ        | こ        | 忍れえぬへねてせけえ | あり |
|                            | れせ       | らさ<br>きせ | らさ<br>きせ | らさ<br>きせ   |    |
|                            | れせ       | らさ<br>きせ | らさ<br>きせ | らさ<br>きせ   |    |
|                            | るす       | らさ<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす   |    |
|                            | るす<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす   |    |
| るす<br>るす                   | らさ<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす |            |    |
| るす<br>るす                   | らさ<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす |            |    |
| るす<br>るす                   | らさ<br>るす | らさ<br>るす | らさ<br>るす |            |    |

|          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 佗自段二中    | 言活佗自段一   | 言活佗自段四   |
| 老恨戀落起    | 居射見干似着   | 鈎住逢打押飽   |
| いみひちさ    | おいみひにさ   | らまはたさう   |
| らさ<br>きせ | らさ<br>きせ | れせ<br>被令 |
| らさ<br>きせ | らさ<br>れせ | れせ       |
| らさ<br>るす | らさ<br>るす | るす       |
| らさ<br>るす | らさ<br>るす | るす       |
| らさ<br>るす | らさ<br>るす | るす       |
| らさ<br>るす | らさ<br>るす | るす       |

右に四段活佐、行よりつてて、さしすせと活用辞ハ、こづりら物と然するも、故為の字ハ義ホ、又人けうへとやまふ辞ともふるなり。○下二段活佐、行よりつててせすくるすきりると、格活、奈、行良、行よ、受く。させさすさすれらりらと、變格活、奈、行良、行よ、受く。一段、活中二、段活。下二段、活中二、變格活加、行佐、行よ、受く。と活用く辞ハ、他とて然せさする辞ホ、故に令れ字の義ホ、まゝ尊タラシと人の志りしれまふと敬いていふ辞ともふるなり。○下二段、活良、行よりつてて、きりるきりると、せすせすするするももの對對て、四段、活らりらと、變格活、奈、行良、行よ、受く。段、活中二、段、活、又變格活加、行佐、行よ、受く。と活用く辞ハ、他よ、然せらるらるの辞ホ、故に被の字

其義ホ、

○四段活の將然言よ。同活佐、行よりつてて、らりらと人ありらりすありせといへば、こづりら物と然するホ。下二段、活佐、行よりつて、ありせらりすらりすれといへば、他とて然せさする辞ホ、まゝ下二段、活良、行よりつて、ありまらりるらりるらりるといへば、他よ、然せらるらると辞とふるなり。さて此四段、活は限て、合離の義コソは、つきて下二段、活と、れがひは入交カて、自他の分るカことハ、はんらる。野之口翁の説ナ、離ナとてらる物と合する詞ハ、四段、活天然テとホ、則、他よ、然テ、下二段、活人爲ニとふるなり。則、自然ニするニホ。

○ことばのちつら 自他活言 上廿七

そまよ反して合ひて有る物と離以詞ハ。四段活人爲とふ也。  
 下二段活天然とあるなりといえれと也。こまよて一目  
 小見度し。心得やけうらうめんが爲ふ。さらし圖おもけする  
 事左のごとし。

|    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 離  |   | 合  |   |
| 他  | 自 | 自  | 他 |
| 裂  | サ | 附  | ツ |
| け  | か | け  | か |
| け  | ま | け  | ま |
| く  | く | く  | く |
| くる | く | くる | く |
| く  | け | くれ | け |
| く  | ま | く  | ま |

かくはごとく相反して用とふは事少し。たがふことあり。  
 余ハ此例よぶごとくへ知るべし。

○一段活。中二段活。下二段活ふど。圖のごとく將然言よ。下  
 二段活佐行ようつして。ささせささすささするささすれと  
 中うよい。一バ。他として然せさする辞あり。まさ下二段活良  
 行ようつして。さらまさらさらさらさらるれとやうよい  
 へバ。他よ。然せらるる。辞とあるなり。

○變格活加行ハ。將然言あるこよ。下二段活佐行ようつせ  
 ば他として然せさするあり。下二段活良行ようつせば。人よ  
 了然せらるる。辞とあること。上の例と同じ。

○同活佐行ハ。將然言あるせよ。四段活佐行ようつしてせ  
 さんせいせすせくとい。一バ。いづうら物と。うするふあり。



まゝ下二段活佐行よりつせば。佗として然せさする辞あり。まゝ下二段活良行よりつせば。佗よりつせらるる辞とあるあり。さてもろくみ體言より。せさすせらるるくくる事多きものあり。こゝ體言とせよ。うけて。うきよさすらるるの辞のそひて。活用けるよて悉く此屬ありと知るべし。

○同活奈行良行より四段活佐行よりつせば。つらら物とつらする辞あり。まゝ下二段活佐行よりつらして。つらつらといへば。佗として然せさする小あり。下二段活良行よりつらして。つらつらといへば。佗より然せらるる辞とあるあり。思ひまがふることおかれ

運用活字

諸の用言より受る辞と。運用活字と号けし。然るは上ある用言のまゝにて。い言さし。小ありて。未語と成さるるも有る也。こゝ小擧たる辞ども。小移しとくれ。悉く其用ととくのふるものおまむなり。詞八衢。受る辞と圖など。おも出て。煩はし。まて言へると。無益の事と思ふ人もあるべし。受る辞ハ圖の如く横と通して。少も違ふとなく。いと正しく。まゝ四種の用言と別ち知らん。この受る辞もて定むるが肝要おまむよく辨へ知らしめんが爲あり。とあるよ。て。用言のところ小將然言。い。すて。トんまし。續用言。い。て。

つゝぬるたゞけや絶定言ハい。めららんべしらしとかい。續體言ハい。かふまでにとよまが既然言ハい。むどと其下受る辞の大抵オホカタの定格サダメリと擧アゲたまど其ハ五轉の位と定むる目標シラシむるものせるよて。委ウカしくする時ハ。かほらまよ有てその受る辞ハと五轉して上ウなる用言ハに屬ツケるはまらうつ活カ用ラぬ有アて。こまよ一段ヒトマづと圖ハもものして其用法ヨリと知らしむ。さて堅イツキよ五段イツキとわらち志シるしたるハ受て用カく辞ハもふ。頭カよ不フ或ハ將ハとうけるハ。假カらつべと正字マサモトと考へ志シるせるふ。圈中カウシツチもあるハ無活用辞ハもふ。用言ハと結辞ハ此條コノのハいせ見て。よく〜思オモひ辨ワふべくハむ。

| 將然言還活用字圖            |                    |                     |                    |                    |
|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|--------------------|
| 飽 <small>アカ</small> | 著 <small>キ</small> | 起 <small>オキ</small> | 得 <small>エ</small> |                    |
| 不 <small>フ</small>  | 將 <small>ハ</small> | 令 <small>メ</small>  | 不 <small>フ</small> | 無 <small>ム</small> |
| ず                   | 將 <small>ハ</small> | 為 <small>ニ</small>  | 有 <small>ア</small> | 活 <small>カ</small> |
| ○                   | ませ                 | め                   | ら                  | ん                  |
| ず                   | ん                  | め                   | ら                  | ん                  |
| ず                   | ん                  | め                   | ら                  | ん                  |
| ぬ                   | ん                  | め                   | ら                  | ん                  |
| ぬ                   | め                  | め                   | ら                  | ん                  |

右の不行ハなるずぬハ。祢ニハ。爲ニもト此反對ハ。○將行ハのんハ。ゆい抄ハハ。然シ有アらぬ事ハとせら。はらましていふ辞ハ。○將爲行ハのませよくまハ。將行ハの一種ハ。

○ことばのちりちり 運用活字 上三十

續用言運活用

| 起 <sup>キ</sup> | 著 <sup>キ</sup> | 飽 <sup>キ</sup> |        |        |   |        |        |        |        |
|----------------|----------------|----------------|--------|--------|---|--------|--------|--------|--------|
| 將既             | 將往             | 將竟             | 往既     | 竟既     | 既 | 來有     | 而有     | 去      | 竟      |
| ○              | ○              | ○              | 小<br>け | て<br>け | け | け<br>ら | た<br>ら | か      | て      |
| けん             | かん             | てん             | ○      | ○      | ○ | け<br>ら | た<br>ら | に      | て      |
| けん             | かん             | てん             | 小<br>さ | て<br>き | さ | け<br>ら | た<br>ら | ぬ      | つ      |
| けん             | かん             | てん             | に<br>し | て<br>し | し | け<br>る | た<br>る | ぬ<br>る | つ<br>る |
| けん             | かん             | てん             | に<br>し | て<br>し | し | け<br>れ | た<br>ら | ぬ<br>き | つ<br>き |
| けん             | かん             | てん             | に<br>し | て<br>し | し | け<br>ら | た<br>ら | ぬ<br>き | つ<br>き |

○この部のちのつとら 運用活字

上三十一

くよハ。形状言久活<sup>マ</sup>。無<sup>ド</sup>れ意<sup>ホ</sup>。<sup>マ</sup>

か<sup>マ</sup>。詞玉緒小<sup>カ</sup>。かよそま<sup>ハ</sup>。人<sup>ニ</sup>延<sup>ル</sup>。如<sup>ク</sup>聞<sup>キ</sup>。大<sup>ニ</sup>人<sup>ト</sup>といふと同意<sup>ホ</sup>。か<sup>マ</sup>。と<sup>シ</sup>。○令<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>の<sup>ま</sup>め<sup>ニ</sup>。む<sup>シ</sup>志<sup>ス</sup>む<sup>ル</sup>。む<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>。下二段活麻行の屬<sup>ホ</sup>か<sup>マ</sup>。○不<sup>有</sup>行<sup>ノ</sup>の<sup>ざ</sup>ら<sup>ざ</sup>。む<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>。む<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ず<sup>シ</sup>。ま<sup>シ</sup>の<sup>ひ</sup>さ<sup>ひ</sup>。ひ<sup>サ</sup>か<sup>マ</sup>。○か<sup>マ</sup>。ハ<sup>シ</sup>。ひ<sup>サ</sup>ひ<sup>サ</sup>抄<sup>ス</sup>。そ<sup>ト</sup>。ら<sup>フ</sup>つ<sup>ツ</sup>。ら<sup>フ</sup>る<sup>コ</sup>ト<sup>バ</sup>。か<sup>マ</sup>。と<sup>シ</sup>。そ<sup>ハ</sup>。徒<sup>ノ</sup>係<sup>ノ</sup>。辞<sup>ノ</sup>ミ<sup>ヨ</sup>。て<sup>ム</sup>す<sup>ス</sup>。ふ<sup>レ</sup>例<sup>カ</sup>る<sup>事</sup>。詞玉緒<sup>マ</sup>委<sup>ム</sup>。○で<sup>ハ</sup>不<sup>ノ</sup>轉<sup>用</sup>か<sup>マ</sup>。詞玉緒<sup>マ</sup>す<sup>ス</sup>。て<sup>ノ</sup>約<sup>マ</sup>。ま<sup>ル</sup>。な<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>。○ト<sup>モ</sup>同<sup>ト</sup>く<sup>不</sup>ノ轉<sup>用</sup>か<sup>マ</sup>。詞玉緒<sup>マ</sup>す<sup>ス</sup>。の<sup>いま</sup>ど<sup>然</sup>ら<sup>ぬ</sup>。と<sup>う</sup>。係<sup>テ</sup>。い<sup>ふ</sup>。辞<sup>カ</sup>。と<sup>シ</sup>。○は<sup>ハ</sup>。い<sup>もの</sup>。よ<sup>さ</sup>。ゆ<sup>さ</sup>。係<sup>ガ</sup>。ふ<sup>意</sup>か<sup>マ</sup>。用<sup>言</sup>の<sup>下</sup>。く<sup>い</sup>。く<sup>い</sup>。へ<sup>マ</sup>。○む<sup>シ</sup>や<sup>ハ</sup>。上<sup>カ</sup>る<sup>は</sup>。願<sup>ノ</sup>や<sup>れ</sup>。い<sup>さ</sup>る<sup>か</sup>。○か<sup>マ</sup>。

| 字 圖            |    |    |   |
|----------------|----|----|---|
| 得 <sup>エ</sup> |    |    |   |
| 無              | 活  | 用  | 辞 |
| つ              | がて | げ  | も |
| 祢              | がて | あふ | ぶ |
| けり             | こせ | い  | や |
| か              | だよ | よ  | か |
| かづ             | の  | ん  | こ |

右の竟行のてつづるつまひ。下二段活多行の屬か。○去行のふにぬぬるぬまひ。變格活奈行の屬よ。所謂畢ぬのぬまて。將然言よてうくる。不行のぬとい異か。○而有行のたらたてたるたといてありの引合よて。變格活良行の屬也。○來有行のけらけけるけといさていその引合よて。變格活良行屬か。○既行のけといさうい所謂過去のいもてさてこ

この目標<sup>マシ</sup>。既<sup>ト</sup>もトと借用ひさるハ或人の説小よまをくハ  
 しくハ結辞の下<sup>ト</sup>いふべし。○竟<sup>テキ</sup>既行のてけてきててて  
 うハ。下二段活多行の續用言よ。過去のいふついでさるが。  
 一つは用言け如くおさるなり。○往<sup>マキ</sup>既行のけけおさるい  
 一つハ。變格活奈行の續用言よ。過去のいふついでさるが。  
 一つは用言の如くおさるか。○將<sup>テム</sup>竟行のてんてめハ。下二  
 段活多行の將然言よ。んめとうけ活用ける辞か。○將<sup>ナム</sup>往  
 行の。かんかハ。變格活奈行の將然言よ。んめとうけえさ  
 らける辞か。○將<sup>テム</sup>既行の。けんけめハ上さる。既行の將然言  
 よ。んめと受け活用ける辞か。○ついで此語の間よさるハ。

て小通ひ句れ終トナるは、いひさして言外の意と云くしむ  
る辞あり。○縁ハ。變格活奈行の屬トて。令トする辞あり。○けら  
し。絶定言よりくる。らしとハ別トて變格活良行の將然  
言より。しとつゞける辞あるが來有行のけらよトかきか  
るあり。○かむハ變格活奈行の將然言と。むトて受てあり也  
さトえうト縁がふ辞あり。○ふトらハゆい抄ト。本よトの  
隨トよりかきて。取直トし撰トびすてふトせぬ辞ありとあり。○  
がトハ難トて形狀言久活トれぐひあり。○がトてらハ物トあり  
てその傍ト小事トとかぬる辞あり。○こせトハ爲トあり。萬葉ト夢  
見えころトらトこすトふゆめトらトこせぬトらトもふトとあるこれ

ふトとも小乞願ふ意とあるあり。○たトハゆい抄ト。其十  
つといひらトらめて。殘トと思トせたる辞ありとあり。○の  
とハ。ろト物事ト一條トたてていふ辞あり。○げトハゆい抄  
と。表トけさまと見て心と量トいふ辞ありとあり。○ゆトハ歌  
よハ。何トへトずとよめ。ゆい抄ト。つひトハさらんとす  
る物のいトまトごえトいてぬトちト小といふ意ありといへ。○  
いトハ。係ト辞あり。徒ト。變格活奈行の續用言トて。ふトぬぬるぬ  
きトとトさらトして。續體言トより受るトとい別あり。この故トて  
と相ト雙トびて活用トとふすこと。てんトもトん相トからトびてトきにト相

○ことばのらづらち 運用活字

雙<sup>ナラ</sup>ぶがごとし。○<sup>ヤ</sup>も<sup>コ</sup>ろ<sup>ハ</sup>六<sup>ツ</sup>ハ係<sup>ハ</sup>辭<sup>ハ</sup>也。

絶定言運用活字圖

| 得 <sup>ウ</sup> | 起 <sup>オ</sup> | 著 <sup>キ</sup> | 飽 <sup>ア</sup> | 也 | 見有 | 将有 | 可 | 不可 | 無 | 活 | 用 | 辞 |
|----------------|----------------|----------------|----------------|---|----|----|---|----|---|---|---|---|
| ふ              | か              | べ              | ら              | ふ | め  | ○  | く | ま  | ら | い | か | ふ |
| も              | ふ              | べ              | と              | ふ | め  | ら  | く | ま  | ら | い | か | ふ |
|                | と              | ふ              | も              | ふ | め  | ら  | く | ま  | ら | い | か | ふ |
|                | や              | が              | と              | ふ | め  | ら  | く | ま  | ら | い | か | ふ |
|                | よ              | む              | て              | ふ | め  | ら  | く | ま  | ら | い | か | ふ |

右の也行のふらふなるふまは、變格活良行の屬なる也。ひ抄よ末なるといへるこれなり。漢文よ也まは、矣字をかけるにぐひして、續體言よ受る小の引合のなりとい異ふ。○見有行のめらめらめらといへるは、變格活良行の屬なり。○将有行のらんらめ、變格活良行の將然言よんめと受けえたらける辭なり。○可行のべくべいといへるは、形狀言久活の屬なり。○不可行のまぐさといへるは、形狀言久活の屬なり。○詞玉緒よすべて絶定ことばと續くる辭なりといふ。○といひ詞玉緒よすべて絶定ことばと續くる辭なりといふ。○といひ詞玉緒よすべて絶定ことばと續くる辭なりといふ。

○このふのらうらら運用活字 上三十四

引かど此屬あり。○づらばらハ可行の轉用にて、べーといふ  
と大りと同ト。○が絲がよい詞、玉緒、中昔の言ふことさきか  
絲むこが絲ふどいへると同トくて、か絲て其まゝ小儲けて  
待つ意ありとあり。○むらむら、何ゆひ抄、數有る、ふがき  
物、分際を立てたごこも何ごこもとどけふといふ辞あり  
とあり。○かゝい、何ゆひ抄、ふとむらむらとある事を  
いひて、人と思えせざる辞ありとあり。○かゝい禁止辞の下  
く、いゝく、いゝ。○とさ、事といひてまゝとらむらむら  
んとする事とさしていふ辞あり。○やゝ二種あり、その一つ  
ハ問ひくるやありとありやありやありとて、續體言より

いゝふさうと。受くと同意ありさて此やゝかも同トさうと  
おもへば、受るところ小大、差異ある事にて、やゝ絶定言よ  
り受け、かゝ續體言より受るが定まらあり。續用言續體言よ  
のやゝてこゝれ二種とい異、其一つの歎息のやゝてことこ  
ふと思ひ混ふることありき。其一つの歎息のやゝてことこ  
りやゝかゝいふやゝどいふ此なる。口言試て、問うくる方  
やゝ。あむらくその詞と、續體言よりつゝかゝりかゝと受てそ  
の意とさどむべく歎息の方れやゝことこゝりよかゝいふよ  
とよと通しうけて、それ味と知るべくあむむ。○よも歎息れ辞  
にて、大む絲やゝ同ト。○かゝ歎辞ありつらゝふらゝかゝの  
あゝとらゆひ抄、人といひくる詞あゝら、思ひらまて

○ことばのちづら 運用活字

ハひと言ふもいふとらて。○もハ歎辭かてうきくうか  
 のもよて。大うさふとつ同ド。ゆゆ抄。すべてやあもの  
 三つ心かよふこと多し。古集に通ひて異本よかまる歌阿ま  
 とらてといへ。おは助辭の下よいふとらていせ見るべし。

續體言運活用字

|    | 飽 <small>アツ</small> | 著 <small>キル</small> | 起 <small>オクル</small> | 活  | 用  | 無 | 在 |
|----|---------------------|---------------------|----------------------|----|----|---|---|
| から | か                   | を                   | むら                   | から | も  |   |   |
| かて | かふ                  | より                  | たよ                   | ま  | そ  |   |   |
| まて | かも                  | が                   | さへ                   | さ  | づ  |   |   |
| かる | まで                  | が祢                  | すら                   | うし | おん |   |   |
| かま | に                   | がに                  | ごと                   | のこ | や  |   |   |

圖得

得

か

こそ

右の在行の。からまてかるとまきハ小のて引合よて。變格活  
 良行の屬かて。○かハ。語のとぢめよくかまてやハ通ふか  
 續體言よて受けといハ異かて。さて此語の終ハかハ二種  
 て係辭とある。ハハ異かて。さて此語の終ハかハ二種  
 らて。其一つハといハくる意よて。おるりかさうかといへる  
 かよて。絶定言よて。ハハやハといハ同意かて。其一つ  
 ハかハ意ハ通ひて歎息辭とあるかて。其物其事ハよて  
 唱へ試みてまき。その意味かのづらまらるるものかて。玉詞  
 緒よ證例をゆまの舉らまき。○かハ。上かる歎息ハ方ハか  
 くと。此二例ハハ過ざるかて。○かハ。上かる歎息ハ方ハか  
 よハハハ重てらひて。一つハ結辭とあるかて。○かハハ





べき事と押出して。儘はこととあるや。か属れこそれ此七つは時。句の中は有る辞ありとあり。御此二つは。かどいふ係辞あり。

|          |      |   |
|----------|------|---|
| 圖字活用運言然既 | 得起著飽 | 無 |
| 辞用活      | ば    |   |
|          | むや   |   |
|          | ど    |   |
|          | ども   |   |
|          | や    |   |

右のむい。既は然有ることを受けていふ辞にて。將然言よて受るはとい。大は意味わかざる事すて云へる。○むやハ上ぶるむ疑けやけりいさるふ。○どども。雖の義あり。詞玉緒は此雖の字は意の言は清と濁との差別あり。既

然る事といふはどどもと濁。未然らざる事といふは。いふは。どどもと清ていふ。此清濁小よて。上の受る言の格も異ふ。○やハ此辞は二義あり。其一つハ疑けやありこれよて語半小なり。結辞もその掟をたがへざる事あり。其一つハ歎息けやあり。こまよて。語の終め小有て。趣意その辞にて落著する事にて。いふやハ。いふやハ。いふやハ。心は味へ知らるしかどの意味ハ。かづうら知らるゝもけふ。ま。語の終は。疑けやの結辞といひのこしたるなり。そハ此例は。ららびよく。思ひこくべくふん。

指揮辭用活字圖

せけへめれ  
けふれ  
けふれ  
何よ  
何ね

無活用辭

|    |   |
|----|---|
| と  | か |
| とも | や |
| とて |   |
| てふ |   |
| てへ |   |

此ハ四段活まゝと變格活奈行良行ともニ既言すふハら指  
揮とふると本よして一段活中二段活下二段活まゝと變格活  
加行佐行の將然言よ。よまゝと祢と受て指揮とふる辭よ  
うけとる辭どもふ。○とともとててふの引合てへの引合  
かふど。既ニ絶定言の條よいへ。○やハ。あやひ抄よ。何よ  
とよめるよ似て。心いさしう打ふるよへるやうよよめり

體言運活字圖

言

無活用辭

|    |   |    |    |    |    |
|----|---|----|----|----|----|
| せ  | の | と  | たら | せら | せ  |
| し  | へ | とも | た  | せ  | し  |
| す  | よ | とふ | た  | せ  | す  |
| する | や | てふ | た  | せ  | する |
| すれ | ら | てへ | た  | せ  | すれ |

此、諸體言よ。受る辭の大らふ。中段言といふ字  
と書とるハ。そこよ入て孰の言をも置べき為。假よ志うせる  
ふ。○為行の。せしすするすまハ諸の字どもよ。解し釋し變

○ことハのちうら  
運活字

格活佐、行小うけ活用ハタラくもて。○爲有行の。せらせりせるせま  
ハ諸の體言よて。紅葉アキバせり冬フユも受けて活用く。してらり引合  
よて、變格活良、行の屬もて。○止有行の。たらたるとたまハ  
とらり引合よて。漢文カンブンは君ミコたららずとも變格活良、行の屬  
もて。○ともい。絶定言の下よいへて。○とふい。といふの引  
合もて。○てふてい。絶定言條よいへて。○のハ連辭ツラネもて。○  
ハ係辭の徒の下よくといへて。○よハ呼びりけて。  
らつらふるころも。○らハ等もトのころよて等ヒトく  
並ぶものよ有る小いふ辭も。○さへきらよてからハ。續體  
言の條よいへて。○のハ續用言の條よいへて。

禁止辭

上ふる用言のうへもいへて。禁イサめ止トムる辭も。そハ諸の用  
言ども。作用あるよつきて。又そまて禁イサめ止トムむる辭のかか  
らず。無くていえらぬまがまなり。いひ抄ヒサカ何ナニも  
か何ナニとい。大む孫勿莫ムスシの字ナリころ。似ニさるべし。譬タトヘへば  
といよるべし人れ。行くといさむるハ。ゆくかまて。東ヒガシも行く  
べし人れ。西ニシも行と禁め。明日アシタゆくべし。今日コンニチ行くといさむ  
るたぐいハ。か行イそなりと有るぞ然シカる変カある。さてこの何ナニも  
ハ用言の第四段ヨナシある。續體言ツラネ下よかといふ辭ヒを加へて。い  
くもかすかとやういふが定サズもかまか何ナニもハ用言の

○ことばのちりちり 禁止辭

第二段ふる。續用言は上よ。おもと置き。下よそといふ辞や  
加へて。おもとそかかしてとやうにいふが定まらふり。さて  
おも何そといふ辞や。近れ世れ人い何そとのいへるん。い  
おもとひが事か。こくねかひ勿れ字義ふる事いたも知こ  
るおとく。下ふるりい其とさす辞か。この故、下よはるそ  
い省くとも。上よはるか。省きてい禁め止むることばよ  
からぬ小よ。古書よい何とのいひてそもトかささ  
いと多う。まよ何かめゆめ何かま何そもゆめか何うか  
く何そもかど。まとくくこくは二つよ。轉用せるか。と  
知るべし。

助辞

すべての詞の最初ハジメまよ中間ナカマまよ最後オシよ添ツいで助辞とい  
ふもの何。其用ハ何の爲ふる小うと考ふるよ。その語意を  
たすけその旨趣を強くさおえしむべきまうよかん何。け  
る。然ま各オノオノと異コトかおもぶとを別ワてるふるべ  
と。世の人その事と心づらぬげよ。譬へばとぞとさだ  
まといひ。熊野と熊野かどいひうへても。とも小意趣よ  
らづらら補ホべひとつ事か。とやうと思ひためる。いこト  
く鹿漏ふるまごか。おのま年ごろ此事ふおとつ  
けて。古人たちの思兼らつとま。用モチひと見得る小よ。

その徴と説とい語彙委しく記とつえとると。今この捷徑  
とせるに因キも小おりの出るまふ。その大略アラマシといざしてい  
さくのおどろうさんとほ。

○詞の最初は有る助辞。

かカ 青アヲふる玉藻沖つ藻。手放テきもをちもかやす。おど  
かカ る。さて此かハ彼の義カにて。そおとふるとのとつ  
う小見ていふ辞シお。六の故コト辞シのカも。その意カより  
つて疑カといふまをけ。て。  
けケ けケとほホおどのけケお。さて此けハ氣キの義カ  
て。物の芽キナと。ほらとめえをうていふお。

さサ さサむムらラ谷ヤ蟻アリおオわワとトおどいふイさサおオ。さて此サハ  
狭サの義カにて。廣カふカ對カへカと多カさサ對カへカて。その物と事  
とと取カせばめて。その純粹モハラとカる方カとカ辞カお。  
志シ 本年の志折りのカらうへて。若草のおもひカまへてお  
どいふ志シお。さて此志シハ古書カ其カとカへカつると同  
義カにて。たカらう小其カとカうごくまカくさカとカる辞カお。  
たタ たタもとやカ吾カいカぞカこカふる。玉カ牙カのカちカをカれカ遠カとカかどい  
ふたカお。詞カ玉カ緒カよ。たカハ回カの意カにても有るべし。回カハた  
むカとも活用ハタラさて回カ行カくやうの意カお。運カ字カ轉カ字カおと  
ともかけカとカらうが如し。

ま 玉つく尾張の國。ますげよ。蕪我の子等。かどいふま  
か。さて此ま。眞の義。よてももの。正中。マナカとい  
ふ。如く。その物の徧カタよらば。よく足。よこの。や。て。不  
足。ところ。か。さ。といふ。辞。か。で。

み ころの。梓の弓。さむらひ。御笠。とま。と。や。か。どの。こ  
か。で。さて。此。み。は。その。物。と。目。して。見。こ。ろ。も。て。任。か  
ど。事物の。空虚ウツロからぬ。方。よ。で。さ。す。辞。か。る。故。よ。それ。よ。で  
轉用ウツリて。は。御某ウツリといひ。て。尊稱ウツリと。か。き。る。も。と。も。小。事物の  
空虚ウツロからぬ。方。よ。で。いふ。か。で。

や 下。が。さ。く。や。が。さ。く。取。ら。せ。や。よ。や。待。て。山。郭。公。こ。と。づ。て

ん か。ど。い。ふ。や。か。で。さて。此。や。い。言。語。四。種。論。小。ト。モ。ニ。ヨ  
ブ。聲。ナ。リ。と。い。る。理。ア。ハ。さ。る。事。か。が。ら。その。義。と。か。い  
て。見。る。小。彌。ま。く。矢。の。義。よ。て。其。事。理。を。貫。ぬ。さ。て。は。よ。く  
指。す。方。よ。い。ふ。辞。か。る。べ。く。か。も。い。る。

い こと。ら。す。も。御。木。の。棹。橋。白。雲。も。い。ゆ。さ。と。ぐ。り。ア。か。ど  
の。い。か。で。さて。此。い。と。射。の。義。よ。て。的。當メアテと。す。る。と。こ。ろ。有  
ア。て。い。ふ。辞。か。で。

を 二。並。ろ。の。と。筑。波。山。ぬ。ま。て。を。ゆ。ら。ん。か。ど。れ。を。か。で。さて  
此。を。い。長。の。義。よ。て。事物。の。を。と。く。と。め。で。い。ふ  
辞。か。で。

○詞の中間ナカラに有る助辞

名ナおハいハたタまマいイもモあアどドおオいイよヨてテ名ナおハいハ俗ソクよヨ  
名ナニニツツレレといトふフこコろロ。たタまマいイハハタタレレカカフフレレのノ意イはハるル  
事初コトハジメのノ一ヒト同トト。

憶オモ良ヨシらラハハ今イマもモまマうウらラんン。くクとトすスつツらラんン絶ツツ綿メンらラハハもモあア  
といトふフらラおオアア。さサてテ此コノらラハハ等トウのノ義イよヨてテそソのノ一ヒトつツとト言イひハ  
てテそソのノ餘ヨリのノ等トウ類ルイとトもモうウぬヌるル辞ジおオアア。

たタふフとトさサらラもモ。かカおオとトさサらラもモあアどドのノろロおオアア。さサてテ此コノ  
らラハハ上ウヘあアるルらラおオ等トウしくク。等トウのノ義イはハるル事コトハハ大オホ同トウうウきキどド小コ  
異イらラずズ。有アのノ義イのノ含イみミたタるルらラんンとトおオぼボゆるルおオアア。こコのノ

故ユヘニニたタふフとトさサらラもモハハ貴キくク有アるル哉カよヨてテよヨくク通キえエかカおオ  
いイらラもモハハ哀アハレくク有アるル哉カよヨてテよヨくク通キゆるルおオアア。

○詞の最後ヲハリに有る助辞

さサうウまマいイさサかカおオいイさサかカおオいイふフさサおオアア。さサてテ此コノさサハハ形カ状サマ言コト  
久キウ活カク志シ久キウ活カク祁キ久キウ活カクとト轉マじジ受ウけケるルおオがガらラ。そソのノ意イ用ヨウひヒをヲ  
すスでデ上ウヘにニいイへヘるルさサおオ同トト。

山ヤマざザくらクラ咲サキおオけケらラハハ花ハナのノいイろロいイろロつツまマいイけケりリおオアア。  
といトふフおオアア。さサてテ此コノおオいイらラもモあアがガめメてテいイふフ辞ジはハるルこコ  
とト。絶ツツ定テイ言ゴン運ウン用ヨウ活カク字ジのノ下カにニいイへヘるル。

糸イトをヲ引ヒくクおオいイふフ糸イトおオアア。さサてテ此コノ糸イトハハ去キのノ義イよヨてテ

○ことばのちのちら 助辞



變格活奈行の屬にて指揮の辞とふまるもや尚續用言  
又指揮辞は運用活字の下といへり。

み

月清ツキ山ヤマたりトふフといふトもモあアてテさて此コノみミの義イハ上ノよク  
いへるが如く。その事物の空虚ウツロからぬ方よといふ辞か  
るがゆゑ。俗に某サニといふことろよふる事。玉霞タマキか  
ど小見えさるが如し。おほ運用活字は下よいへるがぶとく  
辞コトもの條ノよと絶定言運用活字は下よいへるがぶとく  
みミもモおオかカめメ辞コトあアてテまたマタ「ひヒ」君キミ「もモ」ふフちチ袴ハカマぞゾもモあ  
といへるも。大うと同意にてらや。

も

や

あアづヅまマえエやヤとトまマたタいイるルびビこコをヲやヤあアどドいイふフやヤあアてテさて  
此コノやヤ上ノよとふるせる如く。彌ヨシ「矢ヤ」の義イハよと其事コトと歎ノ  
息イキくクらラまマてテにニ。その意イハと剛コウくク重カマるル辞コトあアてテ。

よ

よヨあアてテさて此コノよヨいイ令オノずズるル言コトあアるルことト己ミ小指揮辞運用  
活字の下よいへり。

を

「おオ」かカにニやヤ「えエ」とトこコをヲ「ハハ」重垣カキつツくるル其コノハハ重垣カキとトあアど  
いイふフをヲあアてテ。さサくクよヨまマらラのヲいイふフのコト事コトをヲさサくクいイふフ  
とトくクのコト不フてテめメでデたタよヨ「かカ」るル事コト上ノよヨいイへヘるルがガ如シく。  
かくカクれレおオとトくク其コノれレくクべベきキ所トコロ。定サまマるル位タガのコト有アりリてテ。上ノをヲりリてテ

のことばのちうち助辞

小置て中下は用ひ難<sup>ガタ</sup>と有<sup>マ</sup>。中は用ひて上下はか  
りまぬ有<sup>マ</sup>。下小のつうひて上中はいふつゝおろざる  
ど。種<sup>タビ</sup>くふるが。その意味もまゝさまじく<sup>マ</sup>て。稱美<sup>ホメ</sup>とか  
譽<sup>ホ</sup>めたりふる辞とある有<sup>マ</sup>。尊稱<sup>ホノカ</sup>とかて崇<sup>ホカ</sup>まへたふとぶ  
辞とある有<sup>マ</sup>。歎息<sup>ノド</sup>とかてうの事と深く思ひ入れて。打  
げくはま<sup>マ</sup>。小言<sup>コト</sup>は出て得<sup>マ</sup>も言ひえらぬ餘韻<sup>ヨリ</sup>を添<sup>マ</sup>ふる辞と  
ふるがと有<sup>マ</sup>。甚<sup>イト</sup>も奇<sup>キ</sup>く異<sup>ヒ</sup>くもの小言<sup>コト</sup>は<sup>マ</sup>けるが  
は此助辞<sup>マ</sup>つきてい<sup>マ</sup>。たまはし<sup>マ</sup>。此事<sup>コト</sup>どもいと多<sup>マ</sup>かまども  
くご<sup>マ</sup>くくもの<sup>マ</sup>。たらむ<sup>マ</sup>。中<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>。初<sup>ハジメ</sup>く<sup>マ</sup>。筆<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>の  
爲<sup>マ</sup>。は。まど<sup>マ</sup>。事<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>。ころ<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。漏<sup>モラ</sup>し<sup>マ</sup>。つ。

係辞

か<sup>マ</sup>。して<sup>マ</sup>。小<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。とい<sup>マ</sup>。紐鏡<sup>マ</sup>。ふる<sup>マ</sup>。結辞<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。三條<sup>マ</sup>。また<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。其<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。  
ら<sup>マ</sup>。右<sup>マ</sup>。行<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。徒<sup>マ</sup>。中<sup>マ</sup>。行<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。を<sup>マ</sup>。疑<sup>マ</sup>。左<sup>マ</sup>。行<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。こ<sup>マ</sup>。その<sup>マ</sup>。辞<sup>マ</sup>。ども<sup>マ</sup>。去<sup>マ</sup>。ま<sup>マ</sup>。  
か<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。此<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。上<sup>マ</sup>。よ<sup>マ</sup>。言<sup>マ</sup>。ひ<sup>マ</sup>。下<sup>マ</sup>。り<sup>マ</sup>。たる<sup>マ</sup>。物事<sup>マ</sup>。中<sup>マ</sup>。よ<sup>マ</sup>。す<sup>マ</sup>。ぐ<sup>マ</sup>。れて<sup>マ</sup>。重<sup>マ</sup>。  
止<sup>ヤユト</sup>事<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。撰<sup>マ</sup>。分<sup>マ</sup>。其<sup>マ</sup>。專<sup>マ</sup>。要<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。有<sup>マ</sup>。る<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。一<sup>マ</sup>。つ<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。取<sup>マ</sup>。出<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。下<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。る<sup>マ</sup>。結  
辞<sup>マ</sup>。小<sup>マ</sup>。う<sup>マ</sup>。ち<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。い<sup>マ</sup>。せん<sup>マ</sup>。ため<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。ん<sup>マ</sup>。有<sup>マ</sup>。ける<sup>マ</sup>。是<sup>マ</sup>。小<sup>マ</sup>。よ<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。微<sup>マ</sup>。細<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。る<sup>マ</sup>。  
去<sup>マ</sup>。り<sup>マ</sup>。用<sup>マ</sup>。ひ<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。何<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。う<sup>マ</sup>。ま<sup>マ</sup>。く<sup>マ</sup>。知<sup>マ</sup>。ら<sup>マ</sup>。る<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。ざ<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。れ<sup>マ</sup>。ば<sup>マ</sup>。よ<sup>マ</sup>。く<sup>マ</sup>。古<sup>マ</sup>。よ<sup>マ</sup>。  
用<sup>ツカ</sup>。ひ<sup>マ</sup>。來<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。る<sup>マ</sup>。例<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。尋<sup>マ</sup>。糸<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。深<sup>マ</sup>。く<sup>マ</sup>。考<sup>マ</sup>。へ<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。す<sup>マ</sup>。べ<sup>マ</sup>。く<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。ん<sup>マ</sup>。さ<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。こ<sup>マ</sup>。  
小<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。徒<sup>マ</sup>。が<sup>マ</sup>。疑<sup>マ</sup>。こ<sup>マ</sup>。その<sup>マ</sup>。七<sup>マ</sup>。つ<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。出<sup>マ</sup>。して<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。ぶ<sup>マ</sup>。ける<sup>マ</sup>。ハ<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。ハ  
係辞<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。ら<sup>マ</sup>。は<sup>マ</sup>。此<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。彼<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。離<sup>マ</sup>。く<sup>マ</sup>。ふる<sup>マ</sup>。も<sup>マ</sup>。の<sup>マ</sup>。と<sup>マ</sup>。連<sup>マ</sup>。糸<sup>マ</sup>。接<sup>マ</sup>。くる<sup>マ</sup>。辞<sup>マ</sup>。か<sup>マ</sup>。て<sup>マ</sup>。

○ことばのらうとら

係辞

上四十六

六の故は係辞もぞや疑大そと重かして何れども。そのむず  
びハぞや疑大うよて結ふよても炳焉う。然もべのよて結  
べるはいりふと考るふ。詞玉緒小いごされたる。變格といふ  
類よて。終りの句は歎息の意のよて。留りの下よかかよよ  
やかといふ辞を加へてさくべれぞ多うける。これよよ  
て志むらくふと小い省さつ。おほ後の人けさだめをまつ。  
は

此はハ。續體言よと體言よ受けて。此と彼とを言分つ  
時ハ係辞も。其證例を言ハ春ハのどけし夏ハいつし  
秋ハすむし冬ハさむしかといふもあ。此とを何故よ

言分つ辞といふもあ。夏秋冬ハ有れども中よ長閑さ  
ハ春も。秋冬春ハ有れども中よ暑さハ夏も。人ハ言  
へども我ハ言ハず。人ハ行けども我ハ行らずか。人と  
我とを言ハ分ち。春と夏とを言ハ分ち。まといく千萬と  
あく多うる物事ハ中よても。そまハこれハといハ分つ  
辞も。○また此はハ濁る時ハ。いとく辞ハ意ハあるか  
ア。詞玉緒ハ濁るハ。既ハ然る事といふと。未然事ハか  
糸ていふとの二つあり。既ハ然る事といふハ花さけハ  
月いさハあどの如し。未然事ハか糸ていふハ花さうハ  
月いらハあどの如しといもあ。此こと用言よ。將  
然言續用言の運用

○この本のらうまら 係辞

上四十七

活字の下よ。大まくと俗言にていふ時ハ花さけバ月い  
 既云云。花ガ咲タサカイニ月ガ入タサカイニまた花さ  
 月いらバ花ガ咲タサカイニ月ガ入タサカイニおといひ  
 とい差異ケチメふ。

も

此もハ續體言よと體言よ受て此ハ彼と兼合する時  
 其係辞カキふ。其證例と言ハ。此春もトケけ此夏もトケ  
 つトケこれハ去年の春のどけりトケ此春もトケまこの  
 せトケこれと兼合カキ人もいトケ我もいトケ人も行トケ我も行トケ  
 かやうカキ物二つ兼合カキせていふよ。いく千萬カキとふく多

徒

うる物事カキも兼合カキせて言ふ辞カキふ。また物二ついカキふ  
 らカキずして。只一つカキのる時カキもそれと此と物二つカキのる心  
 えていカキへる有カキ。それカキの其カキくろと得カキて見る事カキふ。た  
 とへカキバ古今カキ小カキつカキまてり野カキべカキこカキろカキれカキくカキがれん  
 花カキ散カキらずカキハ千代カキもへカキぬカキべカキとカキらカキるカキうカキとカキれカキこカキろカキと  
 て味カキハカキへカキ知るカキべカキ。

すべて歌も文もそれ所カキよカキて語カキはカキさカキるカキこカキ小カキよカキて。そ  
 小趣意通カキずることカキふ。されカキバ絶定言ハ用言の下小も  
 いへるが如く。此辞カキよカキてカキされてカキそれ事カキと決著カキするカキよ。係

○ことばのらうカキらうカキ係辞

上四式

辞ふくても。もとよで切きすわる事ふ。さて此徒<sup>レ</sup>屬<sup>ル</sup>  
 さてその格よて結ぶ辞四つ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>をへ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>。つ  
 いで小いさより其義とくべし。○てハ下二段多行の  
 辞よて續用言、運用活字ふ。故<sup>レ</sup>又體言<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ば。<sup>小</sup>と<sup>相</sup>  
 心得<sup>小</sup>て<sup>詞</sup>玉<sup>緒</sup>云<sup>上</sup>よ<sup>を</sup>と<sup>係</sup>て<sup>ず</sup>て<sup>意</sup>ふ<sup>て</sup>の<sup>で</sup>ハ<sup>將</sup>  
 然言、運用活字ふ。故<sup>レ</sup>又體言<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ば。<sup>大</sup>田<sup>豊</sup>年<sup>云</sup>い<sup>く</sup>  
 了これい<sup>い</sup>て<sup>さ</sup>り<sup>ば</sup>て<sup>ふ</sup>ど<sup>い</sup>ふ<sup>詞</sup>の<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>  
 せま<sup>て</sup>る<sup>ま</sup>て<sup>ず</sup>の<sup>濁</sup>て<sup>い</sup>う<sup>つ</sup>て<sup>で</sup>と<sup>ハ</sup>濁<sup>る</sup>ふ  
 詞<sup>玉</sup>緒<sup>云</sup>此<sup>ハ</sup>い<sup>ふ</sup>ふ<sup>ど</sup>の<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>同<sup>屬</sup>ふ<sup>て</sup>○  
 とい<sup>つ</sup>て<sup>去</sup>の<sup>轉</sup>と<sup>る</sup>ふ<sup>て</sup>。さて續用言よ  
 二ハ變格、活奈、行の辞ふ。と<sup>と</sup>相<sup>對</sup>て<sup>こ</sup>  
 受<sup>る</sup>ば<sup>か</sup>く<sup>け</sup>ぶ<sup>と</sup>く<sup>ふ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>ぬ</sup>れ<sup>と</sup>活<sup>く</sup>と<sup>續</sup>體

言また體言よ受るハ活用<sup>カ</sup>さ<sup>る</sup>て。○を<sup>ハ</sup>物<sup>と</sup>つ<sup>が</sup>  
 採<sup>り</sup>とする小<sup>を</sup>といふもの<sup>は</sup>也。其意よて此物といひ  
 て其事につが採<sup>合</sup>せ。其事といひて此物<sup>一</sup>つ<sup>が</sup>採<sup>合</sup>す  
 る辞ふ。故<sup>レ</sup>又續體言よ<sup>ハ</sup>體言<sup>ぞ</sup>や<sup>何</sup>こ<sup>そ</sup>れ<sup>辞</sup>よ<sup>也</sup>も  
 法<sup>く</sup>ふ<sup>て</sup>。○へ<sup>ハ</sup>小<sup>とい</sup>ふ<sup>も</sup>同<sup>格</sup>よて少<sup>異</sup>ふ<sup>て</sup>。たと  
 へば<sup>ミ</sup>ち<sup>の</sup>く<sup>小</sup>も<sup>ら</sup>き<sup>つ</sup>く<sup>小</sup>も<sup>ら</sup>き<sup>其</sup>と<sup>こ</sup>ろ<sup>を</sup>さ  
 して京よ<sup>旅</sup>立<sup>する</sup>時<sup>ま</sup>と<sup>ハ</sup>其<sup>道</sup>中<sup>よ</sup>て<sup>云</sup>と<sup>さ</sup>い<sup>ハ</sup>い  
 ち<sup>の</sup>く<sup>へ</sup>ま<sup>う</sup>で<sup>け</sup>る<sup>人</sup>よ<sup>つ</sup>く<sup>へ</sup>行<sup>と</sup>て<sup>明</sup>石<sup>の</sup>う<sup>ら</sup>  
 よて<sup>ふ</sup>ど<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>也。既<sup>ハ</sup>其<sup>所</sup>よ<sup>至</sup>て<sup>い</sup>ふ<sup>時</sup>ハ<sup>住</sup>よ<sup>し</sup>  
 小<sup>ま</sup>う<sup>で</sup>龍<sup>門</sup>よ<sup>ま</sup>う<sup>で</sup>ふ<sup>ど</sup>い<sup>ふ</sup>ふ<sup>也</sup>。ふ<sup>ま</sup>ら<sup>と</sup>以

○ことばのらうらうら 係辞

て小とへとの用ひやうとあるべし。何ゆひ抄に其所  
いまど至らばして。其かたとさして行意ありとある小  
同。

此の數あるもの中これひとつとさしめてさす辞は  
其かほふその下と見合はべし。おもに辞あるが故に。詞  
玉、緒小づいと結べるうた多くして。人ととぬる類の  
歌はかのづら多からば。又や何れかの疑ふ辞あるや  
えよ。おのほくらんととぬるうた多くして。るとむすぶ  
類はすぐおし。おまかのづらよとさたるものか。と

30

らで。

や

六のやハ數あるもの中このむとつとらたがひさす辞  
あり。此故に古くよ疑のやといひからへ。さてこの  
辞のいさくらかるさとかともいへ。詞、玉緒よすべて  
かハやと似たる辞にて。やと通ハいひてよ。此所も多  
し。故に萬葉のハやといふべき所とかといへる類多し。  
されど又かからばやといふべき所と必かといふべき  
所とたしう小分たれるも多し。みづるよハつらひた  
しとらる。又がと濁る辞はそれハのよ通ふ辞あれば。

○この本のらつむら 係辞

上五十



小何也やもトを小かへて足まば心得やす」とりて。  
○又おにまきやといひて語れさるゝ格なり。詞玉緒よ  
右れきやハ皆上よ何おといふ辞何てやよて切るこ  
お。故よ下ハ何や結よかくをらば。さておのおも  
きやハおになるぞお。いりおきやハいりあるそとい  
ふ意お正とりて。○またや何何やと何の上よやをそへ  
何の下よやをそへていふ格なり。やと上よそへていふ  
ハぬーやれきてるやいづこおどまてやと下よつけ  
ていふハおどやまおぞやおといふたぐひ也○又何  
お下よもとうくるゆて。いづくもいくらもおどかる。詞

玉緒小もとうくるとおハ。其下お結よかくをらば」とい  
おれたるがぶとく。およていもの意おもさ小よ。其  
結もも徒の結びハ屬ハ。詞玉緒小凡ていくと云辞。初  
學ハ輩ハ。こだお小いく千年。いく萬代おどいひて。た  
ど多きこと久しおおと心得たるハハハが事お。いく  
ハ疑お辞おまば。たぐいく千代ぞと千代の數を問こと  
お。お。いく千代もといへをもおて久しお意おあるま  
お。たとへばいく千代よはへ菊お花といひてハ。いくお  
辞うおハ。いく千世もおほへといへばよろしお。お  
すべて此けぢめとよくおたまへて。はらふべき辞お。



とらで。

こそ

六のこそいかにまなく多うるものごとけ中よで。すぐ  
まておもれやたご一つえでいごし。さ極て此其とい  
ふ辞あるとその反といふとの二つに。さてこそい今  
れ俗言小いふもかのづうら雅言れ格を何やまたげ。或  
人れ説小こそといふ意をたへていも。石と玉とひ  
とつよまどまるを指さしてそれぞ玉あるといひ。又手  
れひらへとで何げて。おまこそ玉おれといふほどれ差  
別おで。ぞいひろくこそいせま。と心得べしといへる

小て。大うと心得らる。やうおまど。さやう小めも小も  
何らば。せまたれ辞うと思へばひろれ辞よて。たまも六の  
辞とうま。形容して解示したる人おし。さてこそい六  
ぞといひたるま。小て。こともおげふるやうおれど。立  
歸で。いうある意ぞと尋ねれば。今すこし心小たらハ  
ぬやうおおほえて。ひらめ小いひとくことおらぬもの  
おで。おま小よで。年ごろ意をばけて考へれば。こも  
そも二つおがらものよさす辞おで。こいおま。そいそれ  
よて。六の辞をかさねていふふるべしとぞおもはる。こ  
といへるぞ。實に千古の卓説ある。六の意を得てこれば。

○こそいひのらうらうら 係辞

上五十三

六の辞を用ひたる。所悉く渙然として氷解せばといふ  
事あり。○さこそほもこそは。詞玉緒よさぞとおしとん  
る意と何きども物とほさやうあり。是をらハ詞と上下  
してさよさやうはれ意とぞありてまきバ心得らる  
くあり。さもこそれさもく同ドクアまよ志もこそハ詞  
玉緒ふもこそハ行末とありとありて何やぶむ意の辞  
あり。は絲のこそと意かハきと何あり。およみこともあ  
く。こそれ上よとれそハきるあり。○さて反といふこそ  
ハ。俗よサウコソイウタレ。サウコソ思ウタレといふこ  
とあり。何とぞ辞ありと知るべし。

結辞

むすび辞といハ。上ある係辞カウテス小よアて其主意と立て指定めたる  
事物フバリの落成と言ふ辞マテ。用言よと運用活字ハ。絶定言。續  
體言。既然言ハ三段マて。紐鏡ヒモカミある二轉三轉の辞どもこれあり。  
ア。さて此結辞よ。神代よアても靈アヤく奇クくおごるウ小  
定ままる格マテ。いさくもさマ小物すまトさマ古徹  
小よる事と懶モウマて。或ハ自然のモれと。或ハ助辞ありと  
ひて意マらづらバふと。鹿忽シと思ひ悔チマて古き例レと探  
索ネんものとも。思ひたらぬぞ浅マき古人レちハその時世  
小有マて。その俗言ヨソテを用ひたマこそ正シく調ヒてハ

けを今よてハ雅言といふむうで沿革よりて有けまば。いや  
しげふる今ハ俗言ヨコトの正しからぬ方よて然いとんハ。所謂レ拘  
子定矩レといふものよて。つひまハ知らぬすぢまおちていふ  
らひふるものよねもふてゆくめ。さてそね調ひハ詞玉緒  
もて知。そね意ハ古今集遠鏡よとらやひ抄おど依てて  
明らむべきと。何くもと末書ども多く出来て。中くハ惑ハ  
しげふる小よて。鈴屋大人ハ遠鏡小照し見て。高山ハ峰の梢  
の雲と凌ぎて。目も及びがてふる言の葉と今ハ世のことハ  
小味く譯し得つる小よて。おほ人くねとも。折衷して一つハ  
圖とバつくまて。そハ同書。初學おとれ爲まハ。註釋ハいろ

小委し解さたるも。物の味いと甘し辛し。人ハ語る。聞  
たらんやう小て。語の勢イキホハ辞エラの活用おど。微細コマカふる趣オモト。至  
てハ。猶ホたしう小ハえらら孫バ。其事コトと今イマおねが思ふオモが如く  
ハ。悟サトて得エがたれ物モノふる。俗言ヨコトハ譯ウツしたるハ。たゞおまづら  
らさ思ふオモ等ヒトしし物モノの味いとづらおめて知シまる  
がぶとく古イミ雅言ミヤゴトハ己ミが腹の内ハラノウチの物と一成ナまキバ。一ヒト  
とねあまらふる心むへのたしう小得らるることおほさそ  
らし。しふる小よまて。さて此圖コノカタハあるやう八段ヤキダよものして  
その第一段ハ諸の結辞ムスビゴトどもハ名目ナメお。某用言オノと志るせる  
ハ上ふる用言オノお。某屬オノと志るせるハ運用活字オノお。某行オノと

あるせるに。その結辞の意を得て目標よりてとる字あり無活用辞とあるせるに。轉て用く事あり辞どもあり。この故に

紐鏡より載られずて詞玉緒より出されども。○第二段第

三段第四段ハ結辞あり。その第二段ハ絶定言紐鏡よりてハ右

の結辞第三段ハ續體言あり紐鏡よりてハ中行よりて第四段ハ

ハ既然言あり紐鏡よりてハ左行ありさて其屬辞受辞無活用辞

ふどの傍より一二三四五或ハ體とあるせるハその辞を受よ

る體用ハ言の目標ありハ將然言。二ハ續用言。三ハ絶定言

四ハ續體言五ハ既然言體ハ體言よりなること。運用活字圖

は合せ見てあるべし。○第五段ハその結辞どもの譯ありそ

に中小將然に續用タふと有るハ。その行の用言と譯辞の上

より下へまゝして心得しめんとて物となるあり。○第六

段第七段第八段ハ係辞と結辞とその本末の打合ひは依り

て其いさかひよで出るとる言外の餘韻あり。譬へて四段用言

に結辞をもて一例と言はぐ古今九秋風よほころびぬらし。

藤袴ついでさせてふ。蚤カありゴも徒マもマ結ブ格カ

轉るのカもして。其同暮るうと。見まば明ぬる。夏の夜よ。飽

譯ハかむらげナ山郭公結ふとさのひとさあり。後撰四秋萩

の咲くにしもふど。鹿ハありクつろふ花ハ。おのが妻ウも

疑ハの辞上よりありて。むハど。同トハくといふ辞ながら係辞

○ことばのちのちら

上五十六

結辞

のさゝざまよて。結ぶところ別よふて。その意味の大  
小かえる事か。心と平らにして考ふべし。因よいふ此圖よ  
何らさせるか。その正格なるが此三段の結びのさだまて  
離きて變格といふものなり。詞玉緒二卷小。其例をいざされ  
て云く。上よぞのや何等の辞をわらびてぬるつるもるけ  
るせるるくぬ。不<sub>去</sub>過かどと結びて。其格よそづきかから。て  
にをはどくのえびとい聞えぬと。變格とまづと。何るよて  
よく思へば。かか或いよといふ辞といひれこして。どらめた  
るかまけ。何きも下よ歎息け意の含まてたるかまべ。その  
意して見る。べさか。まよ上よ疑の辞をかきて。下よて。下と

結ひたるわや。後撰戀<sub>一</sub>さも思ひこめつゝ有るもの人よ  
る我がそでと秋の紅葉といづまきさ。まよ君戀ふる涙。滞る  
といふ絶定言よて。問うくる方あるもあま。下よ又やと添  
てさく。又つぬと結べるもなり。金葉夏の夜の月待つ程の手  
意か。又つぬと結べるもなり。すさびよ岩もる清水いく結  
ば。まよ淡路嶋通ふ千鳥の啼く聲。いく夜杯のぬ須  
磨の關守ふど有。こまらハ運用活字ある。竟行往行は限  
たる事よてま。こまらとわさて外よ見つさらば。さて古  
ての例よ何らず。こまらとわさて外よ見つさらば。さて古  
歌はうちまも。稀よいと耳たちて聞ぐる。けも多ク。こ  
まらハ古人と雖も。その一首中よをさま。難さ。強ちよ  
言ひ取らんとせるよ。出来困りたるを。それ事かま。今を  
ま小からひよまん。いざさひが事か。いく度も常の正  
しさとよく守てこそ。ものすべさ。さびかき。

○ことばのちうらら 結辞

上五十七

上層の係辞の段と其結の定格を和り明ら下層の係辞を見合せて其言外を餘韻と云ふべし

|                 |        |     |    |
|-----------------|--------|-----|----|
| 一段用言            | 四段用言   | 絶定言 | 辞係 |
| おいみひにき<br>るるるるる | るむふつすく | 絶定言 | 辞係 |
| おいみひにき<br>るるるるる | るむふつすく | 續體言 | 辞係 |
| おいみひにき<br>れれれれれ | れれへてせけ | 既然言 | 辞係 |
| 井イミヒニキ<br>ルルルルル | ルムフツスク | 徒   | 係辞 |
| はも徒             |        | は   | 譯圖 |
| や               |        | は   | は  |
| 疑               |        | も   | も  |

|                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| 下二段用言                 | 中二段用言              |
| うるゆむふねつすくう            | うるゆむふつく            |
| うるゆむふねつすくう<br>るるるるるるる | うるゆむふつく<br>るるるるるるる |
| うるゆむふねつすくう<br>れれれれれれれ | うるゆむふつく<br>れれれれれれれ |
| エシエメへネテセケエ<br>ルルルルルルル | 井リイミヒニキ<br>ルルルルルルル |
|                       | ワイ                 |
|                       | ノデアラカ              |
|                       | ノデアラウ              |

〇このびのちうら

結辭

上五十八

|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|-----------|-----------|-----|---------------------|------------|------|----------------|------|------|------|-------------|------------|------|-----|-------------|
| 同往既行      | 同竟既行      | 同既行 | 同爲有行                | 同爾有行       | 同也行  | 同見有行           | 同來有行 | 同止有行 | 同而有行 | 受辭不行        | 變格良屬       |      |     |             |
| ニ         | ニ         | ニ   | ニ                   | ニ          | ニ    | ニ              | ニ    | ニ    | ニ    | 一           |            |      |     |             |
| にさ        | てさ        | さ   | せせ                  | ふせ         | ふせ   | めせ             | けせ   | たせ   | たせ   | ざせ          | けう         | しかう  | かて  | けせて<br>へめれり |
| に         | て         | し   | せる                  | ふる         | ふる   | める             | ける   | たる   | たる   | ざる          | けう         | まう   | かる  | けせて<br>へめれる |
| に         | て         | ま   | せれ                  | ふれ         | ふれ   | めれ             | けれ   | たれ   | たれ   | ざれ          | けう         | しう   | かれ  | けせて<br>へめれれ |
| 續用ニテ<br>タ | 續用ニテ<br>タ | タ   | テアル<br>ヲシテアル<br>ヲシテ | ニテアル<br>ガヤ | アレ續体 | トミエテアル<br>トミエテ | テキタ  | テアル  | テアル  | テアル<br>マニアル | カナ<br>イヤウナ | シウアル | ウアル | 續用テアル       |
| は         | は         | は   |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
| も         | も         | も   |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
| 徒         | 徒         | 徒   |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |
|           |           |     |                     |            |      |                |      |      |      |             |            |      |     |             |

○このべのらつてら

結辭

上五十九

|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|-----|------|-----|-----|------|------|------|------|---|---|------|----|----|----|--|
| 同不行 | 同不可行 | 同可行 | 同往行 | 受辭竟行 | 下二良屬 | 下二佐屬 | 形狀用言 |   |   | 變格用言 |    |    |    |  |
| 一   | 三    | 三   | 二   | 二    | 一    | 一    |      |   |   |      |    |    |    |  |
| ず   | まど   | べ   | ぬ   | つ    | らる   | さす   | け    | し | し | り    | ぬ  | す  | く  |  |
| ぬ   | まど   | べ   | ぬ   | つ    | らる   | さす   | け    | し | し | る    | ぬ  | す  | くる |  |
| ぬ   | まど   | べ   | ぬ   | つ    | らる   | さす   | け    | し | し | れ    | ぬ  | す  | くれ |  |
| ヌ   | マイ   | ニ   | ニ   | ニ    | ラレ   | セル   | イ    | イ | イ | 凡    | 又凡 | ス凡 | クル |  |
| ワ   | ワ    |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |
|     |      |     |     |      |      |      |      |   |   |      |    |    |    |  |

はも徒  
はも徒

や

疑





もろくの活言は將然言よ。下二段活佐行と相ふらび受けて佗よ。然せらるる辞あり。自佗活言は下小のせ考ふべし。

○受辞。竟行のつづるつまは。下二段活多行の屬よ。續用言よ。受る辞あり。さて此つゝ。竟の義る。有の義よ。て。竟有のころふるべし。故にぬぬるぬきと相ふらびて。まづらふし。さる物事終るを。かさる辞あり。何れ抄。たへ紙よ。物と書とつけさるやうふおほさざと爲。竟ても。おほその何とわるとたて。いふ辞ありといへ。

○受辞。往行のぬぬるぬき。變格活奈行の屬よ。て。續用言よ。

受る辞あり。さて此ぬ。往の義る。有の義よ。て。往有のころふるべし。故につづるつま。と相ふらびうけて。おのづから。さるること。おほい。かさる辞あり。何れ抄。さ。何れ難からんとおぼゆる事。を。いふ。おほさるやう。お意あり。とあり。

○受辞。可行のべし。けき。バ。形状言。久活の屬よ。て。絶定言よ。受る辞あり。何れ抄。其勢いと知る。おかく。何れよ。おほさる。と量。定めて。いふ。辞あり。とあり。

○受辞。不可行のま。と。けき。バ。可行の反對よ。て。形状言。志久活の屬あり。何れ抄。萬葉の古點。不可顯。ア。

ラハルマジキとよませたるも。此故か<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>。こまも形状

言ふ<sup>ア</sup>。

○受辞不<sup>ス</sup>行の<sup>シ</sup>ずぬ<sup>ハ</sup>ぬの<sup>シ</sup>ずい<sup>ハ</sup>爲<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>反對<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>。本<sup>ノ</sup>の義<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>で<sup>シ</sup>よ

同<sup>ト</sup>く<sup>テ</sup>無<sup>ノ</sup>の<sup>義</sup>ま<sup>テ</sup>古書ニナニ又ネノ言セ

べ<sup>キ</sup>こと<sup>ハ</sup>然<sup>ラ</sup>有<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ガ</sup>。如<sup>ク</sup>活<sup>用</sup>け<sup>ル</sup>ふ<sup>ア</sup>。こまも<sup>ハ</sup>形状<sup>言</sup>

か<sup>ア</sup>。

○變格<sup>ハ</sup>活<sup>良</sup>行<sup>ノ</sup>屬<sup>ル</sup>。け<sup>テ</sup>へ<sup>メ</sup>れ<sup>ヨ</sup>リ。で<sup>ル</sup>れ<sup>ト</sup>受<sup>ル</sup>ハ。

四<sup>段</sup>活<sup>ノ</sup>既<sup>然</sup>言<sup>ハ</sup>つ<sup>ア</sup>て。形<sup>状</sup>言<sup>ト</sup>ふ<sup>ア</sup>れる<sup>マ</sup>テ。飽<sup>有</sup>押<sup>レ</sup>

有<sup>打</sup>有<sup>逢</sup>有<sup>住</sup>有<sup>釣</sup>有<sup>の</sup>こ<sup>ら</sup>ふ<sup>ア</sup>。こ<sup>ら</sup>け<sup>テ</sup>せ<sup>ア</sup>め<sup>リ</sup>ふ

と。運<sup>用</sup>活<sup>字</sup>な<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>異<sup>カ</sup>ふ<sup>ア</sup>。こ<sup>ま</sup>も<sup>ハ</sup>形<sup>状</sup>言<sup>カ</sup>。

○同<sup>屬</sup>か<sup>ア</sup>る<sup>カ</sup>。か<sup>ア</sup>る<sup>カ</sup>ま<sup>タ</sup>。お<sup>う</sup>ア<sup>ら</sup>う<sup>ル</sup>志<sup>ハ</sup>れ<sup>け</sup>う<sup>ア</sup>け<sup>う</sup>

る<sup>け</sup>う<sup>ま</sup>ハ。形<sup>状</sup>言<sup>ノ</sup>將<sup>然</sup>言<sup>ハ</sup>久活ノマよ<sup>ア</sup>。變<sup>格</sup>活<sup>良</sup>行<sup>マ</sup>じ<sup>ト</sup>

ア<sup>テ</sup>。活<sup>用</sup>け<sup>ル</sup>辞<sup>カ</sup>。こ<sup>ノ</sup>故<sup>マ</sup>よ<sup>カ</sup>ア<sup>ハ</sup>よ<sup>ク</sup>ア<sup>ら</sup>う<sup>ア</sup>ら<sup>う</sup>

ハ<sup>ら</sup>う<sup>ア</sup>ら<sup>う</sup>ア<sup>ら</sup>う<sup>ア</sup>ら<sup>う</sup>ア<sup>ら</sup>う<sup>ア</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ル</sup>。

そ<sup>ノ</sup>用<sup>急</sup>か<sup>ル</sup>。小<sup>よ</sup>ア<sup>カ</sup>の<sup>づ</sup>ら<sup>辞</sup>の<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>ふ</sup>ア<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>も

形<sup>状</sup>言<sup>カ</sup>。

○受<sup>辞</sup>不<sup>有</sup>行<sup>ノ</sup>さ<sup>ア</sup>ざ<sup>ル</sup>さ<sup>マ</sup>ハ。將<sup>然</sup>言<sup>ヨ</sup>ア<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>る<sup>ず</sup>よ<sup>ア</sup>

變<sup>格</sup>活<sup>良</sup>行<sup>マ</sup>じ<sup>タ</sup>ア<sup>テ</sup>で<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>ル</sup>。そ<sup>ノ</sup>用<sup>急</sup>か

る<sup>小</sup>よ<sup>ア</sup>。か<sup>ノ</sup>づ<sup>ら</sup>こ<sup>ト</sup>バ<sup>の</sup>せ<sup>ま</sup>ま<sup>る</sup>ふ<sup>ア</sup>ら<sup>ま</sup>も<sup>ハ</sup>形<sup>状</sup>言

か<sup>ア</sup>。

○受辞來有、行のけ、けるけ、ま、續用言よ、て、と受、るが。變格、活良、行よ、わ、て、て、の義、その用、急、る小、よ、の、づ、ら、詞、の、せ、ま、る、よ、の、と、解、する、こ、と、ハ、故、よ、言、語、四、種、論、ハ、事、狀、と、定、め、ら、る、か、と、  
ハ、因、小、い、ふ、紐、鏡、の、第、十、三、段、か、る、け、ける、け、ま、ハ、四、段、活、  
よ、轉、る、よ、て、こ、ま、と、異、か、思、ひ、混、ふ、る、こ、と、か、う、れ、大、  
ま、も、形、狀、言、か、

○受辞。見有、行のめ、めるめ、れ、ハ、下二段、活夜、行の、え、とい、  
ふ、辞、よ、變、格、活、良、行、よ、わ、て、て、え、ハ、義、か、る、と、そ、の、  
用、急、か、る、小、よ、の、づ、ら、こ、と、ハ、の、せ、ま、る、か、。て、此

辞、え、の、引、合、か、ま、と、眼、て、見、る、小、限、ら、心、も、ひ、  
慮、て、然、か、ら、ん、と、大、り、小、推、量、で、定、む、る、と、い、ふ、辞、よ、て、  
大、ま、も、形、狀、言、か、

○受辞。也、行の、か、ま、ハ、所謂、末、か、り、古、今、集、遠、鏡、  
ハ、春、く、ま、ハ、雁、か、へ、る、か、人、ま、つ、む、ハ、か、さ、す、か、ど、の、  
か、ハ、ハ、か、さ、か、る、事、と、大、か、さ、な、見、さ、て、い、ふ、詞、か、と、  
ハ、尚、絶、定、言、運、用、活、字、は、下、小、い、へ、る、と、も、わ、せ、考、ふ、べ、  
大、ま、も、形、狀、言、か、

○受辞。爾、在、行の、か、ま、ハ、續、體、言、よ、受、る、辞、の、に、よ、  
て、變、格、活、良、行、よ、わ、て、て、小、ハ、義、か、る、と、そ、の、用、急、か、る

小よ。かのづら詞のせまきるよてがと小いへることと  
解釋するたろむへか。かほ續體言運用活字下よこと  
まきるがごとし。まきも形狀言か。

○受辭。爲有行のせませるせま。何してといふ辭の變格活  
良行よこと。おてらては義あると。その用急あるふよ。  
かのづらこと。バのせまきるか。まきも形狀言か。

○受辭。既行のさし。ちうハ。ちうハ抄よ過とる事とたさう  
定めていふ詞か。但人よ對ひていふこと。たまて。たまく  
ひとまごとといふとも。まづからとひまづからとたふるは  
この心か。どら。或説まさい。既の義。い。去の義。い。上

か二つやうとせさるか。といへ。まきも形狀言か。

○受辭。竟既行のてきてしてさう。下二段活多行の續用言  
か。るてよ。運用活字さし。ちうハ。ちうハつて。い。さ。ら。け。る。よ。て  
その義とら。い。せて。か。も。ふ。よ。て。さい。竟既。て。い。竟去。て。さ。う。  
竟去既。か。る。べし。さて。此。辭。受。る。と。こ。ろ。小。さ。と。同。く。さ。ま。に。相  
か。ら。び。對。ひ。て。ま。づ。ら。ふ。す。事。と。い。や。を。い。ふ。辭。か。る。こ。と。  
上。か。る。受。辭。竟。行。の。下。よ。い。へ。る。が。如。し。ま。き。も。形。狀。言。か。  
○受辭。往既行のにさし。ちうハ。ちうハ。變格活奈行の續用言か  
る。小よ。運用活字のさし。ちうハ。ちうハ。つて。ま。た。ら。け。る。よ。て。そ  
は。義。と。ら。い。せて。か。も。ふ。よ。小。さ。い。去。既。小。い。往。去。小。い。い

往去シカ既カあるべし。さて此辞受るところ。てさト小同トく相ふらび對ムカひて。かのづりらふやそつることのといふをいふ辞あること上ある受辞。往行の下よいへるがぶとし。かまも形状言ふや。

○受辞。將行のんめいハらゆひ抄ニ未レ然ラぬ事と量ハ何らまいていふ詞カふや。とづふら思ヒ立て。いまゆりんいざかへらんといふハ裏ウラふこと何らんかたらんかといふハ表オモテふことか今よレ後と量ハ此處よレ彼處カとくらまる意カふや。此義を思ひて萬葉ニハ將字とかけるとカふや。

○受辞。將竟行のてんてめい。下二段活多行の將然言。てよレんと受とるが活用けるカふや。何ゆひ抄ニてといふ詞の意たといハ紙ニ物と書つけとるやうニおれニざニ爲シてレ後も。猶その何とあるとたていふ詞カふや。と何る小上ある將ハや何ハせてその意を知るべし。さててんハ右のごとく將竟ハみ義ある小よレふんニ對ヒて願ふ意あると。心の中ニは縁ガひて問かくると。二ツタやうニいへる詞カふや。

○受辞。將往行のふんかめハ變格活奈行の將然言。ふよレんと受とるが。將ハとかテ活用けるカふや。さて此ふんニ二種ハあり。その一ハ縁ガふ意ある。將然言ヨて。何ウふんカさふんカふその一ハ末の事とわシてかテおもひやるカふや。詞玉緒ハ

小常はふんといへる。其もふん。續用言よ。いさふん。お。ふ。段活まて。い。い。ろ。ふ。ん。い。き。ふ。ん。と。そ。の。受。る。異。二。ら。る。い。や。一。段活中二段活下二段活よ。い。こ。の。異。ら。る。こ。と。も。し。然。ま。ど。も。上。よ。い。い。下。に。こ。の。意。を。考。ふ。ま。じ。其。此。辞。て。人。小。相。對。處。に。ま。て。お。の。づ。う。ら。こ。う。も。知。る。ふ。ふ。也。

○受辞將有行のらんらめい變格活良行の將然言らよ。將活よか。言て活用けるふ。也。さて此らん。い。う。た。が。い。て。お。も。い。やる詞ふ。也。故。い。つ。も。見。え。た。る。も。の。と。か。く。ま。さ。る。こ。と。こ。の。と。と。合。せ。て。よ。め。也。細。う。小。い。を。い。人。と。見。て。心。を。知。る。と。木。と。見。て。花。と。か。も。ふ。と。草。と。見。て。た。糸。と。う。た。が。ふ。と。の。こ。つ。い。也。さて。ら。ん。い。人。と。も。う。け。心。と。も。う。け。て。結。辞。ふ。也。人。と。も。

心ともら。ら。い。て。よ。め。る。も。ら。也。か。と。つ。う。と。を。省。さ。て。よ。め。る。も。ら。也。

○受辞將既行のけんけめハ續用言運用活字將然言けよ。將活よか。言て活用けるふ。也。さて此けん。の。け。ハ。既。の。義。ふ。也。と。或。人。の。い。へ。る。如。く。す。ぎ。た。る。事。を。た。し。う。小。い。ふ。こ。と。バ。お。る。が。そ。も。小。ん。の。そ。ハ。言。て。過。去。と。う。た。が。ひ。て。お。し。え。ら。る。こ。と。バ。お。也。

○受辞將爲行のましましうハ將の一種よ。その譯もウとこ。し。ろ。得。て。た。が。ふ。事。ふ。い。さ。て。漢。文。ハ。將。字。を。ま。さ。ふ。と。よ。こ。つ。けて。又。云。云。爲。人。と。爲。と。同。言。の。爲。と。再。い。へ。る。と。同。く。さ。ま。

よて必まゝと結ぶ辞の上は爲者といふ言の何る例  
 あり。古今世の中もたえて櫻のかりませば春の心いとのさ  
 けうらむかど例證牧擧がさし詞玉緒小くい  
 て此まゝの言の意ハ將爲ふるべしと何る人のいへるぞよ  
 かり。

○トハすでは運用活字の下はいへるさて此辞をも徒のこ  
 け結びよて。や疑こそその係辞よてむすべる例あり。たまよ  
 下の結辞紐鏡ハ出されずそはいづきの辞も上の如く  
 轉ずることおけまばありされど詞玉緒ハ例證とらま  
 ちあげてみとせられと。

○らゝいあゆひ抄らんよてハたゝ小見されぬあがら。

ころろからぬ辞あり。何れある人云古くや疑よて結べ  
 る例も何れと。その何らとらとおもふよあて。いふ小とあ  
 まば。俗言ようつして見まばサウナといふよ何とる辞あり  
 ばありといへる。その當否ハいふ何るらん未考へれども  
 いうおもも徒ぞころのこけ結ひとあまるかいと多く  
 てや疑よて結べるはいと稀に見ゆめま。六の圖ハ略け  
 ず。詞玉緒云く。何らゝからゝからゝ  
 まも何らんからんからんの人を活用してといへるか  
 まハ常のらゝと何れもさぶとくかまども常のらゝハ上の  
 言と離きて一つの辞あると。上の言と離きたり。譬へ  
 行くらゝ散るらゝと。いふ行

○この言のらゝと結辞

上六十七

散るの言とら<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>別よとまきとるといふ此<sup>ハ</sup>けら<sup>ハ</sup>  
 重胤云く此<sup>ハ</sup>絶定言よ受る正格あり此<sup>ハ</sup>けら<sup>ハ</sup>  
 上の言小附たま<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>けら<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>別よとまきとるといふ此<sup>ハ</sup>けら<sup>ハ</sup>  
 の<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>くこと<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>から<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>つきた<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>  
 辞<sup>ハ</sup>から<sup>ハ</sup>くこと<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>から<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>つきた<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>  
 有<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>で<sup>ハ</sup>深<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>つきた<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>  
 も<sup>ハ</sup>から<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>例<sup>ハ</sup>ある<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>○重胤云く此<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>  
 と<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>變格<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>良<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>將<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>異<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>  
 る<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>異<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>  
 と<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ど<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>格<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>  
 ○けら<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>詞<sup>ハ</sup>玉<sup>ハ</sup>緒<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ける<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>たる<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>  
 ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>○重胤云く變格<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>  
 良<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>右<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>どの<sup>ハ</sup>格<sup>ハ</sup>  
 と同<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ども<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>これ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>  
 本<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>別<sup>ハ</sup>ある<sup>ハ</sup>辞<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>續<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>

運<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>字<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>  
 ○から<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>こと<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>  
 多く<sup>ハ</sup>變格<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>良<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>將<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>辞<sup>ハ</sup>  
 あり<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
 ○つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>詞<sup>ハ</sup>玉<sup>ハ</sup>緒<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>通<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>含<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>  
 つ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>種<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>さて<sup>ハ</sup>その<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>通<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>  
 小<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>こと<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>古<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>毎<sup>ハ</sup>秋<sup>ハ</sup>ぞ<sup>ハ</sup>悲<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>紅<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>  
 へ<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>里<sup>ハ</sup>秋<sup>ハ</sup>こそ<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>鹿<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>別<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
 糸<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>ど<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
 小<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>所謂<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>含<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>  
 へ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>末<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>とい<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>

結<sup>ハ</sup>辞<sup>ハ</sup>





○受辞而有行のた<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>るた<sup>レ</sup>まハ續用言運用活字ふる。てよ  
 了變格活良行小<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て。て<sup>レ</sup>の義ふる。それ用急ふる  
 小よ<sup>レ</sup>。かのづらふと<sup>レ</sup>バのまふるか<sup>レ</sup>。これも形状言か<sup>レ</sup>。  
 ○受辞止有行のた<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>るた<sup>レ</sup>まハ體言運用活字ふる。とよ<sup>レ</sup>  
 變格活良行<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>の義ふる。その用急ふる小  
 よ<sup>レ</sup>。かのづらふと<sup>レ</sup>のせまれるか<sup>レ</sup>。これも形状言か<sup>レ</sup>。  
 さてこの而有止有の二行とも小<sup>レ</sup>上ふる不有の下來有の上  
 二<sup>レ</sup>らるべ<sup>レ</sup>と。記<sup>カ</sup>ともらせるゆゑよ<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>らげと<sup>レ</sup>。

留よ<sup>レ</sup>上へかへる辭

詞玉緒小云く。すべててよ<sup>レ</sup>ハ辭<sup>カ</sup>よて。留<sup>レ</sup>て上へかへる  
 歌ハ何<sup>イ</sup>もよ<sup>レ</sup>其留<sup>レ</sup>て小<sup>レ</sup>ハの必<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>のこと<sup>レ</sup>の切<sup>キ</sup>  
 る<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>までへ。か<sup>レ</sup>るやう小<sup>レ</sup>よむことか<sup>レ</sup>。云<sup>レ</sup>然る小<sup>レ</sup>後世  
 一<sup>レ</sup>ハ此格と知らで。留<sup>レ</sup>て小<sup>レ</sup>はの或<sup>ハ</sup>初句<sup>ハ</sup>詞かどへ  
 の<sup>レ</sup>係<sup>レ</sup>て。其<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>のさる<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>までへ<sup>ハ</sup>か<sup>レ</sup>らぬ歌の多  
 さ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>が事<sup>カ</sup>か<sup>レ</sup>。と<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>詞<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>か<sup>レ</sup>らぬも難<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>ら  
 ず。た<sup>レ</sup>さる<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>までへ<sup>ハ</sup>か<sup>レ</sup>らざれば。一首の趣と<sup>レ</sup>の  
 と<sup>レ</sup>びと知るべ<sup>レ</sup>。と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>てその證例と<sup>レ</sup>舉<sup>レ</sup>られと<sup>レ</sup>。さてその  
 と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>ある辭<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>古今<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>その戀<sup>レ</sup>や渡<sup>レ</sup>らん<sup>レ</sup>白山<sup>レ</sup>のば<sup>レ</sup>  
 中<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>見る<sup>レ</sup>べくも<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>が身<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>

○この<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup> 追加

古今のこで無く散るぞめでたき櫻も拾遺くも逢ふとく行て  
花の里の住を古今たきけりもとめて折つる白く古今  
十市の里の住を古今たきけりもとめて折つる白く古今  
色いろつる小けりも徒ら我がて古今此里小花ちび寝たつべ  
身世小ふるあがせしまほ立ちへる心わら古今かぐひ  
小家路て古今いよ一まほ立ちへる心わら古今かぐひ  
忘きててふみいよとこ今月見ればち小物こ悲し立よ  
身ハ老や行む年へぬとこ今月見ればち小物こ悲し立よ  
ども新古今君が代ハ限もつらと長濱ども後撰そま千鳥と  
まも無き人のつらと今山うぜも櫻ふきまけつ  
ハ啼さわさまどいもく古今山うぜも櫻ふきまけつ  
まで拾遺悪ふまどいらよ出人の問ふまがら古今ふ分  
問ハ人もち葉のふてかものうら古今何とくぎれ汝が啼  
くうて道と見あがらかものうら古今何とくぎれ汝が啼  
思ふものうらもの由え郎花天の川原は事かぬ物也急まに

古今別まとい山のさくら小まひせあどまてあほ此外  
てんといめんとめとい花のまに  
おも例おほうるべし。

重なる辞の格

詞玉緒云くともとのや何みそと重なる事法縁又多  
その時ともい軽くそのや何い重さ故もさ方格よて  
むすぶあてとらて。それ一例といとくは古今かく山のも  
秋壺さく時ぞも古今入と思ふ心木の葉有らばかくれ如  
くあて。餘ハあま小准らへて心得べし。○同書小二重よとく  
あふる辞はぞとやとぞと何とぞとところとやと何とこそ  
とやとあどまて。その一例といとく。ぞとや後撰去のくめと

〇こころのさしづかし 追加

もととぞつゆや別けぞと何拾遺祈<sup>ア</sup>とぞ<sup>イ</sup>うからん<sup>ニ</sup>と思  
と人のとがむる新葉六<sup>ウ</sup>け氷る霜夜の月<sup>ソ</sup>秋と<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>古  
けそと<sup>ウ</sup>そ<sup>テ</sup>時<sup>モ</sup>有<sup>レ</sup>とさやけり<sup>マ</sup>ける<sup>ル</sup>やと<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>古  
今<sup>ウ</sup>けがた<sup>ス</sup>人の<sup>ウ</sup>すが<sup>コ</sup>小<sup>ウ</sup>う<sup>ク</sup>び<sup>ビ</sup>お<sup>ソ</sup>と<sup>ヤ</sup>中<sup>ウ</sup>務<sup>ウ</sup>集<sup>ウ</sup>花<sup>ウ</sup>と<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>古  
出<sup>テ</sup>て<sup>コ</sup>が<sup>メ</sup>ず<sup>ヤ</sup>た<sup>ス</sup>人の<sup>ウ</sup>すが<sup>コ</sup>小<sup>ウ</sup>う<sup>ク</sup>び<sup>ビ</sup>お<sup>ソ</sup>と<sup>ヤ</sup>中<sup>ウ</sup>務<sup>ウ</sup>集<sup>ウ</sup>花<sup>ウ</sup>と<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>古  
て<sup>コ</sup>が<sup>メ</sup>ず<sup>ヤ</sup>た<sup>ス</sup>人の<sup>ウ</sup>すが<sup>コ</sup>小<sup>ウ</sup>う<sup>ク</sup>び<sup>ビ</sup>お<sup>ソ</sup>と<sup>ヤ</sup>中<sup>ウ</sup>務<sup>ウ</sup>集<sup>ウ</sup>花<sup>ウ</sup>と<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>古  
ぬ身<sup>ヲ</sup>を<sup>イ</sup>う<sup>ウ</sup>よ<sup>カ</sup>そ<sup>セ</sup>ん<sup>コ</sup>ま<sup>ラ</sup>れ<sup>外</sup>ま<sup>ホ</sup>ろ<sup>マ</sup>た<sup>有</sup>る<sup>ベ</sup>し  
如此く二重小むすべる辞ハかさお<sup>マ</sup>た<sup>る</sup>方<sup>ト</sup>と<sup>ウ</sup>う<sup>け</sup>て  
下小つゞくる例<sup>オ</sup>ア<sup>リ</sup>。

本歌よゆづる格

詞玉緒よ云く<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>何<sup>ノ</sup>辞<sup>ト</sup>を<sup>カ</sup>きて<sup>テ</sup>。それ結<sup>ヒ</sup>辞<sup>ト</sup>ハ本歌  
小もづ<sup>ア</sup>て<sup>モ</sup>ぶ<sup>け</sup>る<sup>格</sup>も<sup>ア</sup>。新古今梅<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>た<sup>ガ</sup>袖<sup>ヲ</sup>觸<sup>キ</sup>し<sup>ウ</sup>  
ひぞと春<sup>ヲ</sup>む<sup>ろ</sup>の<sup>月</sup>も問<sup>ハ</sup>む<sup>ヤ</sup>。同<sup>面</sup>影<sup>ハ</sup>霞<sup>カス</sup>める<sup>月</sup>ぞ<sup>ヤ</sup>

と<sup>ア</sup>ける<sup>春</sup>む<sup>ろ</sup>の<sup>袖</sup>も<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>。此<sup>ニ</sup>首<sup>ハ</sup>古<sup>今</sup>ある<sup>月</sup>  
お春<sup>カ</sup>ら<sup>ぬ</sup>我<sup>ガ</sup>身<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>身<sup>カ</sup>して<sup>ハ</sup>い<sup>ふ</sup>本<sup>ノ</sup>歌<sup>ノ</sup>一<sup>首</sup>  
首<sup>ノ</sup>こ<sup>ろ</sup>と<sup>春</sup>や<sup>む</sup>ろ<sup>ノ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>コ</sup>ト<sup>ハ</sup>ま<sup>ア</sup>えて<sup>ノ</sup>と<sup>受</sup>と  
む<sup>す</sup>び<sup>も</sup>本<sup>ノ</sup>歌<sup>ハ</sup>む<sup>づ</sup>ア<sup>テ</sup>も<sup>ぶ</sup>ける<sup>も</sup>の<sup>オ</sup>ア<sup>リ</sup>。同<sup>君</sup>が<sup>代</sup>  
小<sup>ハ</sup>い<sup>ず</sup>ハ<sup>何</sup>と<sup>玉</sup>の<sup>緒</sup>の<sup>長</sup>くと<sup>ま</sup>で<sup>ハ</sup>惜<sup>ま</sup>れ<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>。こ<sup>レ</sup>  
今<sup>戀</sup>一<sup>か</sup>と<sup>糸</sup>と<sup>み</sup>る<sup>と</sup>か<sup>お</sup>と<sup>ま</sup>よ<sup>ア</sup>り<sup>け</sup>て<sup>何</sup>い<sup>ず</sup>ハ<sup>何</sup>と<sup>玉</sup>  
玉<sup>ノ</sup>緒<sup>ハ</sup>せん<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>本</sup>歌<sup>ハ</sup>て<sup>君</sup>が<sup>代</sup>は<sup>い</sup>ず<sup>ハ</sup>何<sup>と</sup>玉<sup>ノ</sup>  
れ<sup>緒</sup>は<sup>せん</sup>その<sup>玉</sup>緒<sup>ノ</sup>長<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>で<sup>ハ</sup>惜<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>ト<sup>本</sup>歌<sup>ハ</sup>ゆ  
もの<sup>ト</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>コ</sup>ト<sup>ハ</sup>ま<sup>ア</sup>り<sup>て</sup>何<sup>ノ</sup>む<sup>す</sup>び<sup>も</sup>本<sup>ノ</sup>歌<sup>ハ</sup>ゆ  
づ<sup>ア</sup>て<sup>本</sup>歌<sup>ノ</sup>こ<sup>ト</sup>ハ<sup>の</sup>こ<sup>ろ</sup>と<sup>ま</sup>よ<sup>ア</sup>り<sup>て</sup>右<sup>ノ</sup>お<sup>と</sup>く<sup>本</sup>歌<sup>ハ</sup>ゆ  
め<sup>テ</sup>の<sup>と</sup>受<sup>け</sup>と<sup>る</sup>こ<sup>ト</sup>ハ<sup>の</sup>こ<sup>ろ</sup>と<sup>ま</sup>よ<sup>ア</sup>り<sup>て</sup>右<sup>ノ</sup>お<sup>と</sup>く<sup>本</sup>歌<sup>ハ</sup>ゆ  
づ<sup>ア</sup>る<sup>格</sup>ハ<sup>の</sup>本<sup>ノ</sup>歌<sup>ハ</sup>知<sup>ら</sup>で<sup>ハ</sup>。辞<sup>ハ</sup>？<sup>ハ</sup>得<sup>が</sup>。つ<sup>る</sup>べ<sup>く</sup>。  
又<sup>い</sup>ま<sup>お</sup>ほ<sup>ろ</sup>け<sup>れ</sup>人<sup>ハ</sup>よ<sup>む</sup>べき<sup>物</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>び</sup>よ<sup>く</sup>せ<sup>げ</sup>ば  
心得<sup>が</sup>た<sup>き</sup>え<sup>せ</sup>歌<sup>ハ</sup>も<sup>あ</sup>ま<sup>さ</sup>ん<sup>ら</sup>し<sup>と</sup>ら<sup>ア</sup>。

○こころのらうらうら 進如 上七五二

動うぬ言よて結ぶ格

詞玉緒小うごうぬ言よて結ぶ格とて出されとす。またハ體  
言とめともいふも。此ハも徒よても。そや疑よても。こそ  
よても皆とまて。趣意落著するも。そハ何故ハ體言よて  
留るぞとわつたづぬまバ。皆其體言ハ下よとバハこて。  
其のこてたる詞よて留るもてけり。それ残るもとバといふ  
ハ。古今青柳と片糸によて鶯のぬふてふ笠ハ梅の花が  
さ。これハぬふてふ笠ハ梅の花笠といふことよて花笠  
も續古今明石瀉とまてかけて見渡せば霞のうへも沖つ  
白浪。これもあてのことバ。徒これハ異なるはハ格とす  
のハこてたるも。徒これハ異なるはハ格とす

とそふるハ。後撰。いたふると思ひかわびそふるさる人  
同ト格も。後撰。いたふると思ひかわびそふるさる人  
ハ。こころいろも。世の常。これハあるの辞。ヤ古今谷風ハ解  
る氷のひまごと小打出る浪。や春の初花。これもあること  
疑新古今。岩根ふも重なる山と分け捨て花も。いく重のつと  
ハ。白雲。これもあることバ。大そ新勅撰。よひ來ハ夢路の  
やと出ぬまバ。色。こそ春の墨染の袖。こまハあることバ  
あまらけうといづまもその體言よてとまてさる下よ。含畜  
せる意のて。はも徒の係辞ハ時ハあての辞の省りてさる  
も。そや疑の係辞の時ハ。あるの辞のとぶりてさるも。いづまも  
その係辞の時ハ。かれの辞のとぶりてさるも。いづまも

○ことばのらうとら

紐鏡まゝ用言ハ。あやふるおれの辞を補ホひ加へたる心もちひ  
よてこぢむるあやとあるべし。

いひかけよて結ぶ格

詞玉緒ハ。此一例と出されとて其ハハも徒ハのハ有ハ。疑ハ  
こそあどいづれの係辞よても有る事小て。多くハ用言と言  
ひうけて下れ體言ハいせさるが。その係辞よよて結ぶ  
あころの意味も大よかハる事あや。たとへハは新古今世の  
中とそむれよとてハ來ハりどもあほうハ事ハおほ原の里  
これハの係辞ある也。あほハと結ぶ格あも後撰。あもや  
る地名の大原の里よいひうけさるあや。も後撰。あもや  
このゆくもかへるも別ハきつハ知るも知らぬもハ坂の關

これハの係辞ある也。あもハと結ぶ格あも千載雪からバ  
あると地名あも坂よいひうけさるあや。も後撰。あもや  
中垣小のえハつハもらハと思ひとく小ハあらぎくハ花ハ。これ  
み係辞ある故よあらハとむすぶ格あや後拾遺。あぢさハ  
るよあらハ花ハいひうけさるあや。も後撰。あもや  
く思ひころやれつきハ獨ハあハでの山吹の花ハ。これハ  
辞あるゆゑよあハと結ぶ格ある也。疑金葉ハあハもハ神も  
地名のあハいひうけさるあや。疑金葉ハあハもハ神も  
うれしとて笠山二葉あ松の千代ハけハ。これハの上ハ疑  
と結ぶ格あると地名のころ新古今。あ夜千鳥あハこそ  
と山よいひうけさる也。ころ新古今。あ夜千鳥あハこそ  
近くある海がさかハぬく月小潮やハつらんハ。これハの  
あハむすぶ格あると地名のあハとれハ如く。その係辞よて  
あハいひうけさるあや。あハとれハ如く。その係辞よて  
むすぶ格の用言と。その下ある言ハいひうけさるものあや。

○右ハ結辞ニ屬けるもの、一の定格と記せるあり、さて上  
小かくけぶとくはげさるい。はらゆる結辞のかぎであるも  
のから。それと見ながら、づうら用ひんとするハ甚ト強  
事あるべし。歌小まれ文よれ作意ハ。各隔ふるものかまへ。  
おのくつういふれさる辞。づう小三つ四つハ過さる  
ものあり。それ語勢小ひくれ。その辞のよてくる小隨ひ。その  
旨趣小相叶へくものすべさわざあり。

